

## 「崩壊」と「海の民」を越えて

—東地中海周辺地域における「後期青銅器時代の崩壊」期に関する近年の研究動向—

有村 元春\*

Beyond 'Collapse' and the 'Sea Peoples': Recent Trends in the Studies on the 'Late Bronze Age Collapse'

Motoharu ARIMURA

東地中海周辺地域では、紀元前 1200 年頃になると様々な地域において破局的な状況が発生したことが知られている。「後期青銅器時代の崩壊」として知られるこの出来事はこれまで数多くの研究者の注目を集め、膨大な研究成果が蓄積されてきた。当時の状況については、「様々な文明が劇的に『崩壊』し、『海の民』による大きな影響があった」とするパラダイムによって語られることが多かったが、近年の研究の進展によって、このパラダイムでは説明できない複雑な状況が明らかになってきている。本稿ではこの時期の「崩壊」と「海の民」に関わる近年の研究動向をまとめ、上記のパラダイムを乗り越える必要性を示す。

キーワード：後期青銅器時代、崩壊、レジリエンス、海の民、ペリシテ文化

The Late Bronze Age Collapse, a series of events in which empires, kingdoms, and sites in the Eastern Mediterranean collapsed or were destroyed, is one of the most controversial topics in ancient history. Scholars have primarily focused on the causes and processes of the collapses and the 'Sea Peoples' phenomenon. However, recent developments in research and excavations reveal that the complexities of the transition from the Late Bronze Age to the Iron Age cannot be explained by the collapse and the 'Sea Peoples' paradigms. To shed light on these phenomena, this paper reviews recent scholarly developments on the Late Bronze Age Collapse.

Key-words: Late Bronze Age, Collapse, Resilience, 'Sea Peoples', Philistine culture

### 1. はじめに

東地中海周辺地域では、紀元前 1200 年頃になると、様々な地域において破局的な状況が発生したことが知られている。具体的には、いわゆる「ミケーネ文明」における宮殿の崩壊<sup>1)</sup>、ヒッタイトの滅亡、ウガリトの壊滅、エジプトの衰退などが挙げられる。こうした後期青銅器時代の終焉とその後続く鉄器時代への移行をめぐる問題は、古代史の中でも最も活発に議論されているテーマの一つである。また、この時期の情勢を語るうえで欠かせない存在として研究者の注目を集めてきたのが、いわゆる「海の民」である。「海の民」は、古くから東地中海周辺地域の「崩壊」を引き起こした存在として重視されてきた。そして、当時の東地中海周辺地域でみられる新たな文化的要素の発生を説明する際にも、「海の民」の影響が想定されることが多かった。現在でも「海の民」という存在自体や、「海の民」が関連するとされる現象について活発に議論が行われている。以上のような当該期における東地中海周辺地域情勢に対する関心の高さは、2000

年代になってから数多くの論集が出版されてきたことにも表れている (Bachhuber and Roberts eds. 2009; Harrison ed. 2009; Venturi ed. 2010; Karageorghis and Kouka eds. 2011; Killebrew and Lehmann eds. 2013; Yener ed. 2013; Stampolidis et al. eds. 2015; Cunningham and Driessen eds. 2017; Fischer and Bürge eds. 2017; Driessen ed. 2018; Niesiołowski-Spanò and Węcowski eds. 2018; Maeir et al. eds. 2019; de Martino and Devecchi eds. 2020; Middleton ed. 2020; Gehler et al. eds. 2022; Jung and Kardamaki eds. 2022; Bürge and Fischer eds. 2023)。

こうした研究成果を踏まえ、E. クライン (Cline) は『1177 B.C.: The Year Civilization Collapsed』において、様々な要因が絡み合った結果として「システム崩壊」(Systemic collapse) が発生したことにより「後期青銅器時代の崩壊」が起きたと説明した (Cline 2014)<sup>2)</sup>。この書籍は研究者・一般読者問わずに大きな影響を与え、議論をさらに活発化させること

\*早稲田大学文学研究科博士後期課程

になったといえよう。

本邦においても当該期への関心が高まっている。2022年に刊行された学術雑誌『古代文化』第73巻第4号及び第74巻第1号では、東地中海周辺地域における青銅器・鉄器時代移行期に関する特集が掲載された。また、一般書として山川出版社から『帝国の崩壊』が出版され、後期青銅器時代の終焉に関わるエジプト、ギリシャ、アナトリアの例が論じられている(大村 2022; 近藤 2022; 土居 2022)。

近年の研究の進展によって、「後期青銅器時代から鉄器時代への移行期の東地中海周辺地域では様々な文明が劇的に『崩壊』し、その過程で『海の民』が大きな影響を及ぼした」とする古典的なパラダイムでは説明しきれない複雑な様相が明らかになってきている。一方で、現在でもこのパラダイムに基づいて当時の状況が語られるケースがしばしばあり(e.g. Stiebing and Helft 2023: 319; Winter 2023: 6)、これは本邦でも同様である<sup>3)</sup>。また、高等学校学習指導要領の改訂によって令和5年度から新たに使用されている「世界史探究」の教科書においても、引き続きこうした歴史記述が見られ、当時の社会が劇的に変化した旨が語られている<sup>4)</sup>。

このような古典的なパラダイムを維持することの問題として、当時の状況を示す証拠についての解釈の幅を狭めてしまう点が挙げられる。近年明らかになってきている複雑な状況や、年々増加する新資料についての理解を進めていくためには、古くからのパラダイムを乗り越え、アップデートする必要があると考える。そこで本稿では、近年の研究成果のレビューを通して、東地中海周辺地域における後期青銅器時代から鉄器時代への移行期の情勢が従来のパラダイムでは説明できない複雑な状況を呈していることを改めて示したい。

そのために、本稿では「崩壊」と「海の民」のキーワードを切り口として論を進めていく。対象地域はギリシャやクレタ島といったエーゲ海周辺地域、アナトリア、キプロス島、レヴァント地域、エジプトとし、扱う時期は紀元前1200~1100年頃の約100年間とする(図1、2)。また、本稿で扱うテーマについては毎年膨大な研究成果が発表されているため、紙面の都合上そのすべてを扱うことはできない。そのため、本稿では2010年代以降の研究を主に取り上げていくこととする<sup>5)</sup>。

本稿の構成は次の通りである。まず、第2章で「崩壊」の要因や「崩壊」に関する考古学的証拠の解釈をめぐる議論についてみていく。第3章では「崩壊」という文脈では語りきれなくなっている状況について確認し、継続性(continuity)、変容(transformation)、レジリエンス(resilience)に着目した各地の状況に

ついて概観する。第4章においては「海の民」についての近年の議論をまとめ、定説のように語られる古代エジプト語史料の解釈についての問題点も指摘する。第5章では「海の民」の存在をもとに語られがちな「ペリシテ文化」(Philistine culture)に注目し、その成立背景を特定の地域からの移民に求めることが難しくなっていることを示す。最後に、第6章において上記の内容をまとめ、今後の課題と展望を示したい。

## 2. 「崩壊」の諸相

### (1) 「崩壊」の諸要因に関する議論

後期青銅器時代の崩壊をめぐるのは、これまで多様な要因が想定されてきた。そして、それぞれの要因についても様々な評価がなされている。これらについて、便宜的に気候変動、地震、紛争と内乱、ネットワークの瓦解、その他の項目に分け、近年の議論をまとめていく。

#### 気候変動

「崩壊」の要因に関する議論の中で、近年特に重要視されているのが気候変動である。この時期に乾燥化の度合いが強まっていたことを示す証拠が各地で見つかっており、特にD. カニエフスキ(Kaniewski)らによる研究成果が広く参照されている(Kaniewski et al. 2013; Kaniewski and Van Campo 2017; Kaniewski et al. 2019)。また、最近でも、木の年輪幅と安定同位体比の分析によって、紀元前1198~1196年にかけてアナトリアで極めて厳しい早魃が起きていたことを裏付けるとする結果が出た(Manning et al. 2023)。後述するような紛争や内乱、人の移動といった人為的な要因についても、そもそも気候変動がなければ起こらないとする環境決定論的な見解もしばしば見られる(Langgut et al. 2013; Cline 2023)<sup>6)</sup>。

一方で、「崩壊」の要因として気候変動を重視する考え方や、そもそも東地中海周辺地域全体に深刻な影響を及ぼすような気候変動があり得たのか疑問視する立場もある。例えば、ギリシャのピュロス(Pylos)遺跡の宮殿の崩壊に関しては、気候変動を主要因とする見解に疑問を投げかける研究成果が出ている(Finné et al. 2017)。宮殿から隔たった地域では破局的な状況がみられないことから、ギリシャにおける気候変動の影響は考えにくいという指摘もある(Middleton 2022)。また、エジプトやウガリトによるヒッタイトへの穀物輸送の記録は、深刻な気候変動によってアナトリアで不作が発生したことを示す証拠とされる場合もあるが、アナトリアでの穀物危機は気候変動ではなく輸送ルートの断絶に原因があるとする研究者もいる(Bryce 2005: 341)<sup>7)</sup>。そして、気候変



図1 本稿で言及する遺跡

動の影響が東地中海周辺地域の全域で生じた結論づけるには、まだ証拠が少ないということも指摘されている (Middleton 2022: 187)。東地中海周辺地域のどの範囲で、どの点において、どの程度気候変動の影響があったのかについては、引き続き検討が必要とされるだろう。

### 地震

地震も「崩壊」をもたらした要因の一つとしてみなされることが多く、当時の東地中海周辺地域では様々な場所で地震による破壊が起きたと言及されてきた (Nur and Cline 2000)。特にギリシャにおける宮殿の崩壊については地震の影響が重視される傾向にあり、例えば、ミケーネ (Mycenae)、ティリンス (Tyrins)、ミデア (Midea) などといった遺跡で、

その影響が指摘されている (Raphael and Agnon 2018; Adrymi-Sismani 2020)。

しかし、地震要因説についても見直しの動きが進んでいる。特筆すべきは、近年立ち上がった「HERACLES プロジェクト」である。このプロジェクトでは、ギリシャのアルゴス (Argos) 平野の遺跡が対象とされ、地質学的な分析、数理モデルによる解析、そして建築技術の観察から再検証が行われている。これによって、地震が宮殿の「崩壊」を導いたとする見解に見直しを迫る成果や、地震の影響について疑問視する見解が発表されている (Hinzen et al. 2018; Hinojosa-Prieto 2020)。また、ティリンス遺跡では、地震によって祭壇から落ちたとされる土偶が報告されているが、これについてもモデリングによる再検証が行われ、地震による落下の可能性は低いということが指摘されている

	ギリシャ	クレタ島	キプロス島	ヒッタイト	南レヴァント	エジプト
1450 BC	LH IIB	LM IIB	LC IIA	中期ヒッタイト時代	LB IA	新王国時代 第18王朝
1400	LH IIIA1	LM IIIA1		シュッピルリウマ1世	LB IB	
1350	LH IIIA2	LM IIIA2	LC IIB		LB IIA	
1300	LH IIIB	LM IIIB	LC IIC	ヒッタイト帝国期 ハットゥシリ3世	LB IIB	第19王朝 ラメセス2世 メルエンブタハ
1250				シュッピルリウマ2世		
1200	LH IIIC	LM IIIC	LC IIIA	後期ヒッタイト時代	Iron IA	第20王朝 ラメセス3世 ラメセス6世
1150					Iron IB	
1100			LC IIIB		第3中間期	

図2 東地中海周辺地域の編年 (Hornung et al. 2006; Stockhammer 2022; 津本 2023 をもとに作成。LH=Late Helladic、LM=Late Minoan、LC=Late Cypriot、LB=Late Bronze)

(Hinzen et al. 2015)。建築物の倒壊の理由としては地震以外にも単に施工不良であったということも十分に想定される (Hinzen et al. 2018; Maran 2022b)。

### 紛争と内乱

紛争や内乱によって破壊されたと想定される遺跡も東地中海周辺地域の一帯で存在しており、例えばギリシャではピュロス、アナトリアではヒサルルク (Hisarlık) やクシャックル (Kuşaklı)、キプロス島ではマア・パレオカストロ (Maa-Palaeokastro) やピラ・コッキノクレモス (Pyla-Kokkinokremos)、レヴァント地域ではラス・シャムラ (Ras Shamra) やテル・カゼル (Tell Kazel) などが挙げられる (Driessen et al. 2023; Millek 2023)。

紛争を引き起こした存在として最も多く言及されてきたのが、いわゆる「海の民」である。エジプトのテーベ (Thebes) 西岸に建てられた、第20王朝の王であるラメセス3世の葬祭殿メディネト・ハブ (Medinet Habu) の壁面レリーフの図像及びテキストなどを根拠に、これまで様々な破壊の痕跡が「海の民」によるものと想定されてきて、現在でもそういった見解が示されている (Kaniewski et al. 2011; Kahn 2018: 184)。

しかし、実際に「海の民」によって壊滅に追い込まれたとされる遺跡や彼らとの戦闘の痕跡を考古学的に

特定することは困難である。例えば、エジプトのデルタ地域東部に位置するテル・エル＝ボルグ (Tell el-Borg) 遺跡の発掘調査では破壊の痕跡が検出されており、それが「海の民」の侵入を示す可能性がある指摘されている (Hoffmeier 2018)。だが、その根拠となるのは、破壊の痕跡がラメセス3世の治世に年代づけられるという点と遺跡の立地のみで、この破壊をもたらした存在を特定するには不十分だといえる。また、具体的には後述するが、メディネト・ハブのレリーフの記述の信ぴょう性にも疑問が呈されるようになっている。このレリーフには、ハッティ (Hatti)、コーデ (Qode)、カルケミシュ (Karkemish)、アルザワ (Arzawa)、アラシヤ (Alashiya) といった名称<sup>8)</sup> が列挙され、これらが「海の民」によって「切り取られた」旨が記述されている (河合 2021: 210-211)。しかし、発掘調査の成果から、この状況には疑問符がつくようになってきている。例えば、ボアズキョイでの調査から、当時のヒッタイトの都は何者かによる破壊を受ける前に放棄されていたと推測されているし、カルケミシュも実際には破壊されていなかったことが明らかになっている (Middleton 2022)。

また、「海の民」に限らず、地域によっては特定の人々との紛争の可能性についても言及されている。ヒッタイトに対する脅威については、カシュカ (Kaska) やフリュギア (Phrygia) が言及されるこ

ともある (Middleton 2017a: 172-174)。また、レヴァント地域南部ではハビル (Habiru) と呼ばれる人々<sup>9)</sup> が攻撃をしかけた可能性も指摘されている (Langgut et al. 2013: 166-167)。

以上は、国家・都市・町などに対して、その外部の勢力が攻め入ったと推定されるケースだが、これに対し、反乱や内乱などといった内部で起きたとするケースも想定されている。このケースについて特に言及されているのがギリシャで、ミケーネ及びティルスとピュロスとの抗争、そして支配者に対するエリートの離反・反乱などが想定されている (Phialon 2020; Maran 2022b)。

### ネットワークの瓦解

後期青銅器時代の東地中海周辺地域では発達したネットワークが形成され、相互依存が高まっていた。そのため、この交易網が瓦解し、金属などの原材料が入手できなくなったことが「崩壊」を招く要因になったとされることが多い (Cline 2014, 2021; Franzmeier 2022)。最近では、モデリングによって当時の政治的・経済的ネットワークの「崩壊」が検証されている (Linkov et al. 2024)。

とはいえ、交易が全くなくなっていたわけではないことを示す証拠も、近年多く発見されるようになってきている。例えば、ギリシャのペラティ (Perati) 遺跡の墓地では、LH III C 期に年代づけられる複数の墓から外来製品が多く出土しており (Murray 2018)、交易網が維持されていた根拠としてしばしば言及される (Nakassis 2022; Millek 2023)。また、ギリシャのイリア岬 (Point Iria) やアナトリアのゲリドンヤ岬 (Cape Gelidonya) の沈没船も、この時期の交易の存在を裏付けるといえる (Berg 2019)。キプロス島ではこの時期のレヴァント地域やエジプトに由来するアンフォラも出土しており、「崩壊」の前後で流通が続いていたとされる (Pedrazzi 2022; Bürge 2023)。先述の通り、金属の流通減は「崩壊」の要因として大きく取り上げられているが、キプロス島における銅の生産はこの時期も行われており、サルデーニャ島にまでもたらされていることも明らかになった (Kassianidou 2013, 2023)。

以上のような状況から、ネットワークの瓦解が国家の「崩壊」に寄与したとする説に対して疑問を投げかける意見もある (Millek 2023: 283-284)。ただし、ネットワークにも、政体の維持に関わるものや、権力とは無縁の人々の生活に関わるものなど、様々な要素や規模がある。こうした要素間の影響について検討していくことも必要とされるのではないだろうか。

### その他

上記以外にも、様々な要因が検討されている。例えば疫病の発生も想定でき (Middleton 2016; Wiener 2017: 47-48)、ギリシャやヒッタイトについてはその影響があった可能性が示唆されている (Walløe 1999; Norrie 2016; Bryce 2019; Alušík 2022)。ただし、疫病に関しては、どの程度の人口に影響を及ぼすものだったのか検討する必要があるだろう。また、ギリシャでは、大規模な建築活動による経済的な負荷を考慮に入れる研究がある一方で (Maran 2022b)、その影響は少なかったと指摘する研究成果もある (Boswinkel 2021)。そして、ヒッタイトやエジプトについては、支配領域の過拡張に要因が求められることもある (Bryce 2019; Franzmeier 2022)。

### (2) 破壊 / 壊滅に関する研究

後期青銅器時代の崩壊を裏付ける考古学的証拠として最も重視されてきたといえるのが、様々な遺跡で確認される破壊や壊滅の痕跡である。破壊された / 壊滅したと考えられる遺跡の分布図がしばしば示されることから、後期青銅器時代の終焉を考えるうえで、この点が大きなウェイトを占めていることがわかる (e.g. Cline 2021: fig. 1)。

先に見てきた通り、遺跡に残された破壊や壊滅の痕跡は、紛争や災害といったものにその要因が求められてきた。しかし、こうした要因以外にも、儀礼的な意図をもって破壊するいわゆる終結儀礼 (termination ritual) の存在も指摘されている。これは、もともとメソアメリカなどで知られており、近年ではギリシャのディミニ (Dimini) 遺跡やレヴァント地域南部のハツオル (Hazor) 遺跡において、その可能性について言及されている (Zuckerman 2007; Millek 2023: 136)。このように、破壊や壊滅の要因については新たな解釈の余地もある。

また、どのような考古学的証拠をもって遺跡が破壊された / 壊滅したと認定するかについては、大きな課題として残っている。この課題について、近年 I. クライマーマン (Kreimerman) が後期青銅器時代を対象にして整理を行なっている (Kreimerman 2017)。また、これまで紀元前 1200 年頃に破壊された / 壊滅したとされてきた遺跡について、その解釈の妥当性を検証する研究も進んでいる。J. ミレク (Millek) による仕事が顕著で、彼は東地中海周辺地域の遺跡を包括的に扱い、再検討を進めてきた (Millek 2017, 2018a, 2018b, 2019a, 2019b, 2020)。この一連の研究の結果、遺跡が壊滅した年代が紀元前 1200 年とはかけ離れている場合や、そもそも破壊された / 壊滅したとは判断できない遺跡が多いことが指摘された (Millek 2023)。ミレクの判断基準が厳しいとする意見もある

が (e.g. Fischer 2017: 191)、この時期の破局的なイメージに見直しを迫る重要な成果だといえるだろう。

### 3. 継続性、変容、レジリエンス

#### (1) 近年行われている新たな議論

紀元前 12 世紀になると、ギリシャ、アナトリア、レヴァント地域においては、それまで力をもっていた国家の支配領域において権力が分散化していく (Killebrew 2014)。アナトリアやレヴァント地域では時代区分上、多くの地域や遺跡で鉄器時代へと移行していく<sup>10)</sup>。この時期は、大国崩壊後の考古・文字資料が乏しい暗黒期だと長らくみなされてきた。しかし、研究の進展によって「崩壊」という文脈では語れない、継続性や変容といった側面に注目した研究が増えてきている。2010 年頃からは様々な論集が生まれ、現在も活発に議論が行われている (Bachhuber and Roberts eds. 2009; Venturi ed. 2010; Galil et al. eds. 2012; Niesiołowski-Spanò and Węcowski eds. 2018; de Martino and Devecchi eds. 2020; Middleton ed. 2020)。

また、困難や脅威に対する適応力、耐久力、復元力といった力を意味するレジリエンスという概念にも注目されるようになってきている (小野塚 2022)。人間社会の分析で用いられるレジリエンスの概念は、1970 年代から生態学分野で発展してきた「生態学的」レジリエンス (阿部・ゲルゲイ 2022) の研究に基づいており、2000 年代に入ると古代社会の研究にも適用されはじめる (Middleton 2017b)。その流れの中で、東地中海周辺地域における後期青銅器時代末から鉄器時代へ移行する時期を対象とした研究成果も、徐々に発表されるようになってきている (Kemp and Cline 2022; Newhard and Cline 2022)<sup>11)</sup>。

レジリエンスに関する研究では、C. ホリング (Holling) と L. ガンダーソン (Gunderson) が提唱した「適応サイクル (adaptive cycle)」がしばしば参照される (Holling and Gunderson 2002)。「適応サイクル」では、「資源の搾取 (exploit) → 保全 (conservation) → 解放 (release) → 再構成 (reorganization)」の四つの段階を図式化したモデルが示される<sup>12)</sup>。ただし、こうした研究で活用されるレジリエンスの概念は生態学に端を発していることから、人間社会に単純に当てはめることが難しいという弱点が指摘されている (d'Alfonso 2023; Winter 2023)。この点を受け、L. ダルフォンソ (d'Alfonso) は、ヒッタイトの影響下にあった各地域がヒッタイトの「崩壊」後に示す対応に注目し、実際には上述の「適応サイクル」の「解放」段階において、地域によって従来のモデルでは表せない多様な結果がみられ

ることを論証している (d'Alfonso 2023)。

#### (2) 各地域の様相

ここでは、「崩壊」という文脈では語れない状況を示す事例について、地域ごとに簡単に取り上げていく。

##### エーゲ海周辺地域

ギリシャでは LH III B 期末に宮殿が「崩壊」に至り、線文字 B も使われなくなることが知られている。しかし、ミケーネ土器やミケーネ土偶といった製品は宮殿崩壊後も継続して生産されていた (高橋 2022)。宮殿崩壊後に再建活動の痕跡が見られる遺跡もあり、例えばティリンス遺跡では、LH III C 期においてもアクロポリスの外側に都市的な景観が広がっていた (Maran 2016)。また、この時期には軍事色の強いエリート層が各地に生まれることが知られ、ミケーネ土器に軍事的なシーンを表す図像が多くなることも、それを裏付けるとされている (Bettelli 2015)。そして、アッティカ、エウボイア、ペロポネソス半島北西部、エーゲ海島嶼部など、宮殿から離れていた地域では、この時期にむしろ発展がみられることがわかっている (Eder and Lemos 2020; Middleton 2022; 土居 2022)。

また、クレタ島では、ハニア (Chania) などで継続した活動が見られる (Driessen and Gaignerot-Driessen 2023)。一方で、LM III B 期末からは高地にいわゆる防衛型集落 (defensible settlement) が形成され、特徴的な適応を示す例として知られている (Nowicki 2018; Iacono et al. 2022)。

##### キプロス島

キプロス島では、実際に壊滅して放棄された遺跡もある一方で、例えばパレパフォス (Palaepahos) などの遺跡が位置する西部のパフォス地区のように、LC III A 期以降も文化的に継続が見られ、むしろ発展したといえる様相も確認されている (Georgiou 2017; Iacovou 2023)。南部のハラ・スルタン・テッケ (Hala Sultan Tekke) 遺跡では、紀元前 12 世紀の中頃の放棄までは活動が継続し (Fischer 2017)、キティオン (Kition) 遺跡も放棄されずに活動が続く (Meyer and Knapp 2021)。

前章で述べた通り、金属の生産・輸出や土器のやり取りも継続して行われていたことが近年の研究からわかっている (Kassianidou 2013, 2023)。また、LC III C 期から LC III A 期にかけて、伝統的なキプロス島の土器が減る一方でエーゲ海周辺地域に起源をもつ土器の生産が増えることが知られており (Bürge 2023)、これはエーゲ海周辺地域から人が移住してきた結果だと解釈されることが多い。そして、線文字 B

などとは異なり、キプロス・ミノア文字 (Cypro-Minoan) の利用も続いていた (Duhoux 2012: 74; Davis 2018)。

#### アナトリア

この時期はかつて暗黒期とみなされていたが、初期鉄器時代の痕跡が多く発見されるようになってきている。ボアズキョイ (Boğazköy) 遺跡では、シュッピルリウマ2世の治世の放棄後の状況について、近年動物考古学の観点からの研究が行われている (Adcock 2022)。東部のアルスランテペ (Arslantepe) 遺跡においては、部分的な破壊の痕跡は見られつつ、居住域での活動は継続するとされる。西部のリマン・テペ (Liman Tepe) 遺跡においても断絶なく活動が続く (Mangaloğlu-Votruba 2014)。

また、紀元前12世紀に入るといわゆる後期ヒッタイト時代となっていくが、ヒッタイト王家の系統をひく「残存国家」が存在していたとされている (Harrison 2009: 187)。例えば、カルケミシュではヒッタイト王家とのつながりを示す支配者が存在していたことがわかっている (Weeden 2013)。なお、楔形文字で記述するヒッタイト語は残されなくなるものの、ルウィ語象形文字を使った文書や宗教に関わる要素はヒッタイトの「崩壊」後も残っていた (Simon 2020)。

#### レヴァント地域

アムーク (Amuq) 平原で見つかった遺跡では、新たな発見が相次いでいる。特に、鉄器時代にかけて新たな中心地として発展していくテル・タイナト (Tell Tayinat) 遺跡の発掘成果は注目される (Welton et al. 2019)。また、現在のシリアでは、ラス・エル＝バシト (Ras el-Bassit) 遺跡などで継続した活動が見られる (du Piéd 2008; Killebrew 2014: 597)。テル・アフィス (Tell Afis) 遺跡では破壊が見られた後にもすぐに活動が再開し、土器などの文化的な伝統も継続することがわかっている (Venturi 2013, 2020)。

現在のレバノンでは、紀元前1200年頃に壊滅した/破壊されたと思われる遺跡が限定されている (Núñez 2017: 273; Millek 2023: 251)。例えば、サレプタ (Sarepta) 遺跡では、後期青銅器時代から鉄器時代にかけて破壊などの痕跡がなく継続した活動が見られる (Anderson 1988)。このような状況は、東地中海周辺地域一帯が時を同じくして壊滅的な被害を受けたという見方への反証となる。

現在のイスラエル・パレスチナにあたる地域では、多数の遺跡が調査されていることもあり、特に多様な状況が確認されている。例えば、テル・ケイサン

(Tell Keisan) 遺跡の第13層では破壊層が見られ、紀元前1200年頃のものだとされていたが、近年行われた土器の検討によってその時期が紀元前1150年頃に繰り下げられている (Millek 2023: 128, 290)。

また、日本隊が調査を行なっているテル・レヘシュ (Tel Rekhesh) 遺跡では、破壊の痕跡がなく、物質文化も継続性が見られることが明らかになっている (小野塚 2022)。後述するフィリスティア (Philistia) 地域においては、これまで当該地域で見られなかった特徴を持つ「ペリシテ文化」が色濃くみられるようになる。

なお、ベト・シャン (Beth Shean)、ディール・エル＝バラ (Deir el-Balah)、テル・エル＝ファラ南 (Tell el-Far'ah South)、ヤッフア (Jaffa) などの遺跡においては、紀元前12世紀に入ってもしばらくエジプトの拠点として機能するとされる (Killebrew 2014; Burke et al. 2017)。

#### エジプト

エジプトは他地域と比べるとやや異なる様相を呈し、当時の第20王朝が終わりを迎えるのは、ラメセス3世と「海の民」との衝突から約100年後の紀元前11世紀に入ってからである。第20王朝の衰退を印象づける出来事として、これまで支配下においていたレヴァント地域南部からの撤退が挙げられるが、紀元前12世紀後半のラメセス6世の治世頃までは当該地域に対する影響力を維持していたと考えられている (Morris 2018)。また、規模は縮小しつつも遠征や王墓などの建築活動はしばらく続いていた (Cooney 2022)。なお、穀物価格の上昇や、労働者のストライキ、不作の発生といった事態が起きていた点も、徐々に衰退の一途を辿ることを示すとされている (Franzmeier 2022)、注意も必要である。というのも、これらの出来事が発生したことが窺える場所や、それを裏付ける資料が出土している場所のほとんどがテーベ周辺であり、この状況をどの程度エジプトの他の地域にまで敷衍して考えられるのかについては慎重な判断が求められるためである。

#### (3) 構築された「崩壊」史観への批判

以上のように近年の研究成果の進展によって、「崩壊」という観点だけで語れない複雑な様相が明らかになってきている点や、壊滅したとされる遺跡の年代が実際には誤っている事例がミレクの研究によってわかっていることから、「後期青銅器時代の崩壊」は研究者によって構築されてきたものであると指摘する声も上がるようになってきている (Middleton 2022; Millek 2022b, 2023)。資料の原典や引用元の批判的な検討がなされないままに「崩壊」を示す事例が引用に

引用を重ねられてきたことや、パラダイムにとらわれて実際には年代が離れている事例を紀元前 1200 年「頃」のものだとして結びつけていったことなどが、その要因として挙げられている (Miller 2020: 240; Millek 2023: 271-288)。このような無批判に引用を重ねていくことの問題は、後述する古代エジプト語史料の解釈についても当てはまる。

#### 4. 「海の民」の問題

##### (1) 「海の民」の誕生とメディネト・ハブのレリーフ

「後期青銅器時代の崩壊」のイメージを強く印象づけたのが「海の民」の存在であり、後期青銅器時代から鉄器時代への移行期の状況を考える上で注目を集めてきた。古代エジプト語史料に現れるルッカ (Lukka)、シェルデン (Sherden)、デニエン (Denyen)、エクウェシュ (Ekweš)、シェケレシュ (Shekelesh)、テレシュ (Teresh)、ウェシエシュ (Weshesh)、チェケル (Tjeker)、ペレセト (Peleset) の計九つの集団が「海の民」としてまとめられており (Cline and O'Connor 2003: 111-116)、いくつかの集団については他の言語で書かれた資料にも現れるとされている (Adams and Cohen 2013)。

ただし、古代エジプト語史料に「海の民」という言葉が記されているわけではない。19 世紀に E. ド・ルージェ (de Rougé) が 'peuples de la mer' という言葉を用い (de Rougé 1855: 14)、その後、G. マスペロ (Maspero) の著作において 'sea people' が使われた (Maspero 1896)。こうして、後世の研究者によって作られた「海の民」という存在が広く知られるようになり、ヨーロッパからエジプトにかけての侵攻により東地中海周辺地域が壊滅的な被害を受け「崩壊」に至るといったストーリーが形成された。

様々な資料が「海の民」の集団について言及するなか、これまでの研究に最も影響を与えてきたのがメディネト・ハブのレリーフである。しかし、先述の通り、このレリーフに刻まれた内容がどの程度の信ぴょう性をもつのかについては、今もなお議論を呼んでいる。こうした王室碑文は、プロパガンダ的性格が強く、誇張が多分に混じった表現となっている可能性があることや、過去の王が残した碑文を模倣しているとする説などもあり、近年では多くの研究者が歴史資料としての有用性について注意深い態度をとるようになってきている (Roberts 2009, 2015; Strobel 2013)。

##### (2) 「海の民」を構成する集団の由来と影響

「海の民」の由来については今もなお活発に議論が行われているが、多くの集団の由来については見解の一致を見ていないのが現状である (Jung 2017)。集

団名が地名と結びつくと想定されることが多く、様々な説が提唱されており、近年では D. レッドフォード (Redford) が包括的に検討を行なっている。ただし、例えば、シェルデンはサルデーニャ島に、エクウェシュはギリシャのアカイア (Achaia) に由来するとされることも多いが、単純に結びつけられるわけではない (Redford 2018)。

また、各集団を表す語からだけではなく、図像表現からも推定が試みられている。古くから注目されてきた衣装についての研究は現在も行われている (Van de Moortel 2020)。「海の民」が持つ剣を根拠にイタリアとの関連性を指摘されたり (Jung 2017: 31)、船の表現などからはヨーロッパのウルネンフェルト文化 (Urnfield culture) と結びつけられたりすることもある (Wachsmann 1998: 137-138)。このように、その由来についてはヨーロッパまで視野に入れられることも多い一方で、アナトリアやレヴァント地域に求める考え方もある (Ben-Dor Evian 2017: 278)。

なお、九つの集団のうちのいくつかについては、メルエンプタハやラメセス 3 世治世の記録が刻まれるよりも前の時代から文字資料に現れることがわかっている。例えば、シェルデン、デニエン、ルッカの三つについては、紀元前 14 世紀のアマルナ文書で言及されているとされる (Adams and Cohen 2013)<sup>13)</sup>。シェルデンについては、ラメセス 2 世の治世にはエジプトの軍事組織に組み込まれ、ファイユーム (Faiyum) 地域に居住していたことが知られている (Emanuel 2013)。少なくとも「海の民」の一部については、紀元前 1200 年頃になって突如として姿を現したわけではなく、以前から東地中海周辺地域で認識されていた存在だったといえる (Emanuel 2013; Mynářová 2022; 近藤 2022: 49)。

また、これらの集団のうちのいくつかは、エジプトによってレヴァント地域南部に入植させられたと言及されることがしばしばあるが、その解釈は見直される必要があるだろう。この入植説の根拠として重要視されているのが、ハリス・パピルス 1 と呼ばれる古代エジプト語史料である。この史料では、「海の民」が捕虜としてエジプトに連行され、彼らがエジプトの軍事拠点におかれた旨が記されている。しかし、それが具体的にどこだったのかは示されておらず、レヴァント地域南部だと特定する内容は書かれていない (Barako 2013: 37-39; Ben-Dor Evian 2017: 269-270; Koch 2021: 77)。また、地名・集団名などといった様々なカテゴリーの名詞が列挙されていることで知られる「アメンエムオベのオノマステイコン (Onomasticon of Amenemope)」は、「海の民」がレヴァント地域南部に住みついたことを示す根拠として言及される。この資料では、アシュケロン (Ashkelon)、アシュドド

(Ashdod)、ガザ (Gaza) の順に記された少し後にシエルデン、チェケル、ペレセトが順に並ぶ。このことから、この部分にレヴァント地域南部の状況が反映されているとみなされがちである。しかし、レヴァント地域南部の地名と「海の民」の集団名の間にかかれてある名称を鑑みると、それらを簡単に結びつけられるわけではないことがわかる (Koch 2021: 77-78)。具体的にいうと、ガザとシエルデンの間にアッシリアとスバルトゥ (Subartu) を示す可能性のある語が記載されており (Gardiner 1947: 191-194; Hannig 2015: 1182)、レヴァント地域南部だけのことを表しているわけではないと考えられる。なお、この点にはあまり触れられていないが、シエルデンに関しては原典となるパピルスの写真を見ると、語の前半がほとんど欠損していることがわかる (Gardiner 1947: pl. X)。このパピルスの詳細な報告を行なった A. ガーディナー (Gardiner) が推測したシエルデンではなく、別の語の可能性も捨てきれない点にも注意しておく必要があるだろう。

### (3) 「海の民」の性格

「海の民」と呼ばれることになった人々がどのような性質の集団だったのかについても、様々な検討がなされている。まず文字史料や画像資料に表現されているような、暴力的／侵略的な側面を重視した考え方である。彼らの支配領域を拡大するという意図や植民地を作るためだったとする見解なども示されている (e.g. Kahn 2018: 184)。「海の民」が海と陸から東地中海周辺地域を広範囲に渡って侵略していったとする古典的な見解は、近年においても示される (e.g. Kaniewski et al. 2011)<sup>14)</sup>。また、海賊的な性格についても注目されるようになってきている (Hitchcock and Maier 2014, 2016)。

一方で、暴力的な側面に注目するのではなく、女性や子供、動物を連れている様子から、彼らが移民や難民であったとも考えられている (Cline 2018; Bryce 2019: 261)。この移動の背景としては、気候変動や地震によって本来の居住空間から離れざるを得なかったという理由が想定されることが多い。しかし、気候変動が理由とする説に対しては、なぜ敢えてより乾燥した地域に進んでいったのかという疑問も呈される (Knapp and Manning 2016; Middleton 2022)。

また、古代エジプト語で書かれた集団のリーダーを表す語に注目した研究も行われており、特定の居住領域をもたない流動的な集団であった可能性が指摘されている (Matić 2022)。

以上のように、「海の民」の由来や性質をめぐっては現在も明確な答えが出ておらず、その多くについては決定打に欠けており、まだ確定的な状況ではない。

このような状況で、「海の民」と強く関連づけられてきたのが、紀元前 12 世紀になるとレヴァント地域南部でみられるようになる「ペリシテ文化」である。次章では主に「ペリシテ文化」に関する議論に注目し、「海の民」が残したとされることの多い考古学的証拠についてみていく。

## 5. 「海の民」と「ペリシテ文化」

### (1) ペリシテ人と「ペリシテ文化」

レヴァント地域南部のフィリスティア地域では鉄器時代になると、一見したところエーゲ海との結びつきを感じられる製品や建築物が多く見られるようになることが知られている。また、旧約聖書においては、現在では一般的にクレタ島に比定されているカフトル (Kaphtor) からやってきたとされるペリシテ人が、上記の地域に居住していたと言及されている (創世記第 10 章、エレミヤ書第 47 章、サムエル記)。そして、これらの点に加えて先述のペレセトにまつわる古代エジプト語史料の解釈なども踏まえ、「海の民」、特にペレセトがこの地域にやってきて、新たな文化である「ペリシテ文化」が成立したとする見解がしばしば示されるようになった。

ペリシテ人が居住したとされる都市はペンタポリスと呼ばれる。アシュケロン、アシュドド、テル・ミクネ／エクロン (Tell Miqne/Ekron)、テル・エッ＝サフィ／ガト (Tell es-Safi/Gath)、ガザがそれにあたり、現在では、ガザ以外においては発掘調査による成果が多数公表されている (Hitchcock 2022)。

ペリシテ人やペリシテ文化の起源をめぐる議論はこれまで絶えず行われてきた。例えば、旧約聖書に記されたゴリアテ (Goliath) やセレン (Seren) といった語に注目した検討などがあるが (Niesiolowski-Spanò 2016)、未だ見解の一致を見ていない (Maier et al. 2016)。また、ごくわずかに出土している文字史料についても、エーゲ海周辺地域で使われていた線文字との関連が指摘されることがあるが、実際には東地中海周辺地域の様々な要素がみられるため、特定の起源を想定するのは難しいとされる (Davis et al. 2015; Maier 2022b)。こうした状況において重要となるのが、「ペリシテ文化」を特徴づけるとされる考古資料である。

### (2) 「ペリシテ文化」は特定の集団・地域に由来するのか

「ペリシテ文化」を特徴づけるとされるのは、「ペリシテ土器」、ライオンの頭を模した容器、いわゆるアシュドダ土偶 (Ashdoda figurine)、織機に用いる錘、調理用土器といった遺物や、ギリシャで見られたメガロ

ン建築や炉などといった遺構である (Killebrew 2005; Wylie and Master 2020) これらの考古遺物は T. ドタン (Dothan) によって包括的に研究され (Dothan 1982)、この成果がその後の研究に大きく影響を与えてきた。

「ペリシテ文化」の成立をめぐることは、これまで特定の地域からの移民や伝播を想定されることが多かった。ドタンや A. ヤスル＝ランダウ (Yasur-Landau) は、それぞれのモノグラフにおいて包括的な検討を行い、エーゲ海からの移民を想定する見解を示した (Dothan 1982; Yasur-Landau 2010)。また、A. キルブルー (Killebrew) は、キプロス島に関連する要素が多く見られるとし、キプロス島をその候補として重視した (Killebrew 2005)。

「ペリシテ文化」の起源を考える上で古くから注目を集めてきたのが「ペリシテ土器」である。このうち、ペリシテ1式土器/ペリシテ単彩土器 (Monochrome) の生産がいつから始まるのかという点については、活発に議論が行われている (Asscher et al. 2021; Levy et al. 2022)。現在では発掘調査の進展により、例えば、テル・エツ＝サフィ遺跡では、紀元前 13 世紀にペリシテ土器が生まれる可能性が指摘されている (Asscher et al. 2015)。

ペリシテ土器は、一見するとミケーネ IIIC 式土器との結びつきが強く感じられる。しかし、ミケーネ土器は、LH IIIB 期まではギリシャのベルバティ (Berbati) 遺跡で主に生産され広く流通していたのに対し、LH IIIC 期になるとここで作られた個体の輸出量が減少し、その一方でキプロス島製のものが広く流通することが胎土分析から明らかになっている (Mountjoy 2020; Zuckerman et al. 2020)。そのため、ミケーネ土器と類似するといっても、実際には単純にペリシテ土器とエーゲ海周辺地域とを直接結びつけることは難しい。

また、ペリシテ1式土器の段階において、ギリシャ、クレタ島、キプロス島といった様々な地域に由来する要素が含まれていることも指摘されている (Mountjoy 2017: 366, 2018: 1249-1265)。器形に関して、ペリシテ土器で見られるレパトリーがミケーネ土器のものよりも限定的である点、キプロス島由来の器形が存在する点、レヴァント地域在地で作られていた器形が含まれている点が注目される (Mountjoy 2018: 1247-1248; Stockhammer 2019; Maeir 2022b)。このような事実から、エーゲ海との結びつきを裏付ける証拠として見られてきたペリシテ土器は、実際にはエーゲ海と直接には結びつけることが難しくなっている。そして、ペリシテ土器に限らず、その他の遺物や遺構についても、ギリシャ、クレタ島、アナトリア、キプロス島、そして在地の要素が見られること

がわかっている (Killebrew 2005; Meiberg 2013; Ziffer 2018)。

「ペリシテ文化」を特徴づける遺物からだけではなく、当時の食生活からその起源を検討しようとする試みも行われてきた。特に、豚肉の消費傾向は集団の違いを認識できる要素とみなされることが多く注目を集めている。近年の研究では、後期青銅器時代にはレヴァント地域南部では豚肉の消費はあまり見られないのに対し、鉄器時代になるとフィリスティア地域で豚肉の消費量が増加し、それ以外の地域とは有意な差が生まれることが指摘されている (Faust 2018)。こうした研究成果は、鉄器時代に新たな人々がやってきた証拠とされることもある。

一方で、こうした解釈に対して慎重な立場をとる研究者も多い。大きな問題は 2 点あり、一つ目は、豚肉の消費は東地中海周辺を含め様々な地域で行われていたため、豚肉の消費傾向によって「ペリシテ文化」の由来を特定することは難しいという点である (Killebrew 2005: 219)。二つ目は、フィリスティア地域内でも遺跡によって傾向に違いがあり、さらに時代が下り鉄器時代 IIB 期になるとイスラエル王国の領域でも豚肉の消費が増えることが明らかになっている点である (Sapir-Hen 2019)。そのため、豚肉の消費傾向と集団の差異を結びつける考え方の有効性に疑問が投げかけられている (Price 2020)。

また、鉄器時代になるとフィリスティア地域で外来の植物が現れるようになるという研究が発表されており、これもしばしば人の移動と関連づけられているが (Frumin et al. 2015; Frumin 2022)、いわゆる「土器＝人」論法が危ういように、必ずしも移民を想定する必要があるわけではないとする意見もある (Maeir 2022b)。

こうしたなか、アシュケロン遺跡出土の青銅器時代及び鉄器時代の人骨から得られた古代 DNA の分析も近年行われ、初期鉄器時代にヨーロッパとの繋がりを示す人間が現れたことを示す結果が報告された (Feldman et al. 2019)。しかし、このデータからペリシテ文化を考える上での問題点も指摘されている。具体的には、サンプル数が限られていること、そして現状利用できるのが鉄器時代 I 期の新しい段階 (もしくは II 期の可能性もある) の資料が主体となっているため、「ペリシテ文化」の起源を考えるうえで直接的に関係しているわけではないことなどが挙げられる (Knapp 2021: 45-55; Maeir 2022a: 196)<sup>15)</sup>。

### (3) いかにして新たな「文化」が生まれたのか

これまでペリシテ文化の成立を考える際は、特定の地域からの移民を想定することが多かったが、第 2 節でみたように、特定の地域には求めづらい複雑な様相

が明らかになっている。「ペリシテ文化」の成立を考える上で移民を想定しない考え方は以前から存在し、特に S. シェラット (Sherratt) が提唱した、ミケーネ IIIIC 式土器に似た在地土器の生産は当時の交易活動が背景となって生まれたという説が注目を集めた (Sherratt 1998)。近年 B. ナップ (Knapp) も「ペリシテ文化」の成立に関して「移民派」の提示する根拠に疑問を呈し、「移民神話」(migration myths) と批判している (Knapp 2021)。

とはいえ、多かれ少なかれ人の移動が作用したことを前提とする見解は現在でも多い。しかし、これまでの説とは異なるのが、文化移入 (transculturation)、エンタングルメント (entanglement) といった概念に基づいていることで、特定の集団や地域にその由来を求めるのではなく、様々な人や要素が関わり合うことによって「ペリシテ文化」が生まれたとされる (Hitchcock and Maeir 2013; Stockhammer 2018, 2019; Maeir 2022b)。もし「海の民」のペレセトが実際にフィリスティア地域に定住していたとしても、その他の様々な人や要素との関わりあいの中で発生したと考える方が自然かもしれない。

また、ミケーネ IIIIC 式土器に影響を受けているとみられる土器の生産は、フィリスティア地域以外のレヴァント地域やアナトリア南方の沿岸部でも行われていたことが明らかになっている。アナトリアでは、キリキア (Cilicia) のタルスス (Tarsus) 遺跡やキネット・ホユック (Kinet Höyük) 遺跡などにおいてそのような土器が出土しているという事実から、この地域にも「海の民」が移住したと指摘されることがあるが、考古資料からは移民の存在はほとんど見出せないという意見もある (e.g. Lehmann 2017: 247)<sup>16)</sup>。フィリスティア地域の状況に加え、近年明らかになったこのような例を踏まえると、ミケーネ IIIIC 式土器に影響を受けた土器の生産は、当時の東地中海周辺地域の広範囲で共通してみられる現象として、特定の地域からの移民や伝播といった考え方にとらわれずに検討していくべきかもしれない (Routledge 2017)。

## 6. 「崩壊」と「海の民」を越えて

本稿では、後期青銅器時代から鉄器時代への移行期に関する研究について、「崩壊」と「海の民」のキーワードに注目して近年の研究動向を概観し、従来のパラダイムでは説明できない複雑な様相が明らかになってきていることを確認した。最後に、本稿で確認した議論についてまとめつつ、今後の課題と展望を述べる。

まず「崩壊」に関してである。「崩壊」の要因に関する研究は今も行われているが、どの要因がどの程度実際に影響したのかについては明らかでないことも多

く、研究者間で意見が大きく分かれるものも多い。このような状況で、今もなお行われる主要因を特定しようとする試みに意味があるのかについては疑問も示されている (Maran 2022b: 241-242)。まずは、小野塚が指摘するように「各遺跡の『高解像度』の調査にもとづく居住史」の復元を進め (小野塚 2022: 39)、その蓄積をもって当時の東地中海周辺地域の大きな歴史を復元していくべきであろう。

そして、ミレクが行ったような破壊の痕跡に関する再検証や、これまでの解釈を再検証する動きは、今後も行われていくべきである。そのためには、十分な報告がなされていない発掘成果の公開も必須となるだろう。また、発掘調査報告書などの文献ベースによる再検証はもちろんのこと、学際的な研究による検証も引き続き重要となる。例えば、本稿で扱ったギリシャにおける地震説の再検証のような研究は、地震によって壊滅したとされる他の地域の遺跡でも活用することができるのではないだろうか。また、自然災害に加え、人為的な破壊と思われる証拠の検証も待たれる。例えば、ティリンス遺跡ではエリート層の活動領域が火災にあっていないことから、ここをターゲットに放火されていると解釈されることがある。しかし、意図的な放火の結果ではなく、建築物の構造上の問題や風の流れの影響である可能性もあり、一概に人為的なものだけでは言い切れないという見解が示されている (Maran 2022b)。こういったことを検証する研究はまだ行われておらず、検討すべきことは数多く残されているといえる。学際的な研究は、当該期の状況を明らかにする上で今後も大きな成果を生むだろう。

ギリシャの宮殿、ヒッタイト、ウガリトなど、これまで大きな存在感を放っていた存在が相次いで力を失ったという点では、紀元前 12 世紀頃が大きな転換点となったことは間違いない。しかし、歴史記述には様々な階層からの視点が存在することを今一度確認しておきたい。たしかに上述の政体はこの時期に立ち行かなくなったが、そういった政体の影響を受けない部分ではこれまでの生活が継続し、むしろ発展が見られたり新たな勢力が勃興したりする状況も見られた。交易活動に関しても、アマルナ文書に見られるような支配者間での贈与交易や、LH IIIIB 期までのミケーネ土器のような特定の地域に由来する製品の大規模流通などの痕跡はたしかに見えなくなる。しかし、それでも地域間のネットワークは完全には断絶せず、様々なものの移動が継続していた。当時の状況は、G. カウギル (Cowgill) のいうように「崩壊」ではなく「政治的分散化」(political fragmentation) (Cowgill 1988: 256) と表現した方が適切かもしれない。これまで語られてきた破局的なイメージの多くはある一面 (特に政体や権力の側面) に着目したものが多かつ

た。実際に当時起きていた状況を語る上では、権力を持たざる大多数の人々の状況についてもみていく必要があるだろう。

また、「崩壊」の要因や新たな物質文化が生じる背景を語る際に「海の民」の存在が重視されてきたが、この存在についても未だその実態の多くが明らかになっていない。「海の民」の中でも特にペレセトの定住が契機となって生まれたとされてきた「ペリシテ文化」については、現在では人の移動を前提とする考えが多いものの、特定の集団や地域を想定せず、複雑なプロセスで生じたと考える立場の研究も増えてきている。このような状況のなかで、「古代エジプトの人々が認識していたペレセト」「当時実際にフィリスティア地域で生活していた人々」「旧約聖書が描写するペリシテ人」が同一であると考えたことの意味や妥当性については再考の余地があるのではないだろうか。

そして、様々な変化を「海の民」の存在で説明することの問題点として、当時の人の移動や技術の接触の様相に関する状況が単純化されてしまうという点も挙げられる。ことは恐らくもっと複雑で、実際に当時移民があったとしても「海の民」とは異なる集団だった可能性も大いにあるだろう。「海の民」は便利な概念ではあるが、変化の要因を安易に「海の民」に求めても、何も説明していないことと同じにならないだろうか。また、「海の民」のような人々は後期青銅器時代末に突如として活発化したわけではなかった。例えば、アマルナ文書で言及されているルッカは、紀元前14世紀の段階でアラシヤを悩ませる存在だったことが窺える (Moran 1994: 111-112; Rainey and Schniedewind 2015: 350-353)。後期青銅器時代末の文字資料のインパクトに引きずられず、長期的な視野で当時の人の移動や関わりについて検討していく必要がある。

残念ながら、現在利用できる文字史料は数に限りがあり、中にはその信ぴょう性に疑問符がつくものもある。こういった史料のマキシマムな解釈は、往々にして人々の心を強く惹きつけ、やがてそれがパラダイムや定説となりがちである<sup>17)</sup>。本稿で扱った時代についても、こういったプロセスによって、出土資料などの解釈が方向づけられてきた面も否めない。いうまでもなく、文字史料から歴史を検討する際には史料批判が重要である。実際に起きた出来事のうち、文字に記録されたものはごくわずかであるため、限られた記録によってパラダイムが形成されることの問題点は認識しておくべきだと考える。

こうした状況の中で、当時実際にどのようなことが起きていたのか明らかにするには、毎年のように豊富に出土・検出される考古資料にいかにか口を開かせるかが鍵となる。冒頭で述べた通り、本稿で扱ったテーマ

については毎年膨大な研究成果が蓄積されており、今後もますます資料は増加する。古典的なパラダイムにとらわれない柔軟な分析・解釈によってこそ、当時の東地中海周辺地域について、より実態に沿った歴史を語るようになるだろう。

#### 謝辞

肥後時尚氏には、文献収集にご助力いただいた。また、匿名査読者の方からは多くのアドバイスを賜った。そして、Teresa Bürge 博士、Lorenzo d'Alfonso 教授、Jan Driessen 教授、Peter Fischer 教授、Louise Hitchcock 教授、Maria Iacovou 教授、Vasiliki Kassianidou 博士、Uroš Matić 博士、Jesse Millek 博士、Jana Mynářová 教授は、筆者からの文献提供依頼に対して快く応じてくださった。ここに記して、深く御礼申し上げる。

#### 註

- 1) 後期青銅器時代のギリシャには、宮殿 (palace) と呼ばれる行政センターを中心とした政体があったことが想定されている。宮殿はいくつか存在しているが、それぞれの宮殿を中心とする複数の政体が存在したのか、それとも特定の宮殿を中心とする統一国家が存在したのかについては現在も議論が続いている (Dickinson 2019; Kelder and Waal 2019; 土居 2022)。
- 2) 2021年には改訂版が出版された (Cline 2021)。この改訂版出版を受けて、*Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 誌の第10号第2巻 (2022年) でフォーラムが掲載された。なお、続編となる *After 1177 B.C.: The Survival of Civilizations* がプリンストン大学出版局から2024年に刊行予定である。
- 3) 例えば次の文献が挙げられる。内田 2007: 198-199; 長谷川 2013: 126-128; 馬場 2017: 165-166; 河合 2021: 210-211; 間舎 2022: 532; 日本西アジア考古学会 西アジア考古学講義ノート編集委員会編 2022: 47-48, 74; 山崎・五十嵐 2023: 78-79。
- 4) 特に帝国書院版において顕著である (桃木ほか 2023: 61)。また、定評ある山川出版社の用語集では「海の民」が重要語として登録されている (全国歴史教育研究協議会編 2023: 9)。
- 5) 2010年以前の研究成果については Cline 2014 や Knapp and Manning 2016 で多く取り上げられている。なお、後者の研究成果は、本稿で扱う内容と通ずるところがある。しかし、この10年弱の間でも研究が大幅に進展しており更新が必要とされる。この更新を行うことも、本稿の目的の一つである。
- 6) クラインは『1177 B.C.』において単一要因説を避け、複合的な要因によるシステム崩壊説を打ち出したが、その改訂版において、様々な要因の中でも気候変動が主要因であるとする旨の記述を追加し、(Cline 2021: 179)、近年発表された論考においても気候変動を重視する立場をとるようになっていく (Cline 2023)。
- 7) ボアズキョイ遺跡で出土した文字史料の再検討では、この時期の記録にヒッタイト衰退を明確に示すものはみられないとする研究成果もある (Miller 2020)。
- 8) アルザフについては、アナトリア西部のエーゲ海に面した地域に位置することはわかっているが、具体的な位置はまだ定まっていない状況である (Gander 2017)。コーデについては、シリアを想定する見解が近年示されている。(Simon 2011)。アラシヤはキプロス島にあった政体と結び

- つけることでほぼ見解の一致を見ているが、その同定に対して慎重な立場をとる研究者もいる (e.g. Gilbert 2017)。
- 9) このほかにも、ハピルやアピルのように表記される場合もある (Grabbe 2017: 25-26)。
  - 10) ただし、鉄器利用が卓越するという実態を伴っているわけではなく、「真の鉄器時代」と呼べる時期に移行するには時間がかかる (Hodos 2020; 津本 2021)。
  - 11) また、本稿執筆時点でも後期青銅器時代から鉄器時代に移行する時期のレジリエンスに関する複数の論集の刊行が予定されている (Yasur-Landau et al. eds. forthcoming; Masetti-Rouault et al. eds. forthcoming)。
  - 12) レジリエンス理論に関しては阿部・モハーチ 2022 で簡潔にまとめられている。本稿での訳語もこの文献に拠った。
  - 13) 具体的には、EA38・EA81・EA122・EA123・EA151 に記載がある (Moran 1992: 111-112, 150-151, 201-202, 238-239; Rainey and Schniedewind 2015: 350-353, 482-485, 640-643, 762-767)。
  - 14) こうした想定背景にある思想についても考察が行われている。ヨーロッパ中心史観ないしギリシャ中心主義 (Hellenocentrism) が反映されているとする見解が提示されている一方で (Silberman 1998; Killebrew 2014: 596)、これとは逆に近代のバルカン半島情勢が反映された結果、野蛮な集団としての印象づけが行われたとする意見もある (Matić and Franković 2020)。
  - 15) DNA 分析で得られた結果とエスニシティや文化とを結びつけることの危険性についても近年警鐘が鳴らされており、注意が必要である (Kristiansen 2022; Maran 2022a)。
  - 16) また、テル・タイナト遺跡における近年の調査によってミケーネ IIIC 式土器の在地生産品が多く出土していること、そして鉄器時代にこの地を支配していた王国がパリスュティン (Palistin) と呼ばれていた可能性があり、ペリシテと類似する指摘されていることから、旧約聖書に現れる地域だけでなく、レヴァント地域北部にもペリシテ人が存在していたのではないかという説が出されるようになってきている (Janeway 2008, 2017; Hawkins 2009, 2011; Weeden 2013)。しかし、パリスュティンとペリシテの関連づけを疑問視する声もある (Maeir 2022a)。
  - 17) こういった事例は他にもみられ、筆者自身以前に検討を行っている (Arimura 2022)。
- 参考文献**
- Adams, M. J. and M. E. Cohen 2013 The 'Sea Peoples' in Primary Sources. In A. E. Killebrew and G. Lehmann (eds.), *The Philistines and Other "Sea Peoples" in Text and Archaeology*, 645-664. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Adcock, S. E. 2022 Collapse, Complexity, and Caprines: Zooarchaeological Investigations of the Hittite State and Its Afters. *Journal of Anthropological Archaeology* 68. doi: 10.1016/j.jaa.2022.101465.
- Adrymi-Sismani, V. 2020 The Destruction of Mycenaean Centres in Eastern Thessaly. In G. D. Middleton (ed.), *Collapse and Transformation: The Late Bronze Age to Early Iron Age in the Aegean*, 23-34. Oxford, Oxbow Books.
- Alušík, T. 2022 Epidemic, Infectious and Parasitic Diseases in Prehistoric Greece. In S. Aulsebrook, K. Żebrowska, A. Ulanowska and K. Lewartowski (eds.), *Symposium Egejskie: Papers in Aegean Archaeology Vol. 3*, 13-19. Turnhout, Brepolis.
- Anderson, W. P. 1988 *Sarepta I: The Late Bronze and Iron Age Strata of Area II, Y: The University Museum of the University of Pennsylvania*. Beyrouth, Université libanaise Beyrouth.
- Arimura, M. 2022 A Reconsideration on the "Tnj = Mainland Greece" Theory. In N. Kawai and B. G. Davies (eds.), *The Star Who Appears in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo*, 1-10. Wallasey, Abercromby Press.
- Asscher, Y., D. Cabanes, L. A. Hitchcock, A. M. Maeir, S. Weiner and E. Boaretto 2015 Radiocarbon Dating Shows an Early Appearance of Philistine Material Culture in Tell Es-Safi/Gath, Philistia. *Radiocarbon* 57/5: 825-850.
- Asscher, Y., M. A. S. Martin, D. Master and E. Boaretto. 2021 A Radiocarbon Sequence for the Late Bronze to Iron Age Transition at Ashkelon: Timing Early Philistine Pottery. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 386: 77-93.
- Bachhuber, C. and G. Roberts (eds.) 2009 *Forces of Transformation: The End of the Bronze Age in the Mediterranean*. Oxford, Oxbow books.
- Barako, T. J. 2013 Philistines and Egyptians in Southern Coastal Canaan during the Early Iron Age. In A. E. Killebrew and G. Lehmann (eds.), *The Philistines and Other "Sea Peoples" in Text and Archaeology*, 37-52. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Ben-Dor Evian, S. 2012 Egypt and Philistia in the Iron Age I: The Case of the Philistine Lotus Flower. *Tel Aviv* 39/1: 20-37.
- Ben-Dor Evian, S. 2016 The Battles between Ramesses III and the 'Sea-Peoples': When, Where and Who? An Iconic Analysis of the Egyptian Reliefs. *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde* 143/2: 151-168.
- Ben-Dor Evian, S. 2017 Ramesses III and the 'Sea-Peoples': Towards a New Philistine Paradigm. *Oxford Journal of Archaeology* 36/3: 267-285. doi: 10.1111/ojoa.12115.
- Berg, I. 2019 *The Cycladic and Aegean Islands in Prehistory*. Oxon and New York, Routledge.
- Bettelli, M. 2015 From Wanax to Basileus. Archaeological Evidence of Military and Political Leadership in Late Mycenaean Society. *Origini* 38/2: 123-149.
- Boaretto, E., Y. Asscher, L. A. Hitchcock, G. Lehmann, A. M. Maeir and S. Weiner. 2019 The Chronology of the Late Bronze (LB)-Iron Age (IA) Transition in the Southern Levant: A Response to Finkelstein's Critique. *Radiocarbon* 61/1: 1-11.
- Boswinkel, Y. 2021 *Labouring with Large Stones: A Study into the Investment and Impact of Construction Projects on Mycenaean Communities in Late Bronze Age Greece*. Leiden, Sidestone Press.
- Bryce, T. 2005 *The Kingdom of the Hittites*. Oxford, Oxford University Press.
- Bryce, T. 2019 *Warriors of Anatolia: A Concise History of the Hittites*. London and New York, I. B. Tauris.
- Bürge, T. 2023 The LC IIC to IIIA Transition at Hala Sultan Tekke: A Pottery Perspective. In T. Bürge and P. M. Fischer (eds.), *The Decline of Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*, 229-260. Nicosia, Paul Åström förlag.

- Bürge, T. and P. M. Fischer (eds.) 2023 *The Decline of Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*. Nicosia, Paul Åström förlag.
- Burke, A. A., M. Peilstöcker, A. Karoll, G. A. Pierce, K. Kowalski, N. Ben-Marzouk, J. C. Damm, A. J. Danielson, H. D. Fessler, B. Kaufman, K. V. L. Pierce, F. Höflmayer, B. N. Damiata and M. Dee 2017 Excavations of the New Kingdom Fortress in Jaffa, 2011-2014: Traces of Resistance to Egyptian Rule in Canaan. *American Journal of Archaeology* 121/1: 85-133.
- Burlingame, A. R. 2020 New Evidence for Ugaritic and Hittite Onomastics and Prosopography at the End of the Late Bronze Age. *Zeitschrift für Assyriologie und vorderasiatische Archäologie* 110/2: 196-211.
- Cline, E. H. 2014 *1177 B.C.: The Year Civilization Collapsed*. Princeton, Princeton University Press.
- Cline, E. H. 2018 The Sea Peoples. In J. Spier, T. Potts and S. E. Cole (eds.), *Beyond the Nile: Egypt and the Classical World*, 29-34. Los Angeles, J. Paul Getty Museum.
- Cline, E. H. 2021 *1177 B.C.: The Year Civilization Collapsed: Revised and Updated*. Princeton, Princeton University Press.
- Cline, E. H. 2023 'Mind the Gap': The 1177 BCE Late Bronze Age Collapse and Some Preliminary Thoughts on Its Immediate Aftermath. In M. Centeno, P. Callahan, P. Larcey and T. Patterson (eds.), *How Worlds Collapse: What History, Systems, and Complexity Can Teach Us About Our Modern World and Fragile Future*, 97-107. New York, Routledge.
- Cline, E. H. and D. O'Connor. 2003 The Mystery of the "Sea Peoples." In S. Quirke and D. O'Connor (eds.), *Mysterious Lands*, 139-159. London, UCL Press.
- Cooney, K. M. 2022 The New Kingdom of Egypt under the Ramesside Dynasty. In K. Radner, N. Moeller and D. T. Potts (eds.), *The Oxford History of the Ancient Near East. Volume III: From the Hyksos to the Late Second Millennium BC*, 251-366. Oxford, Oxford University Press.
- Cunningham, T. and J. Driessen (eds.) 2017 *Crisis to Collapse: The Archaeology of Social Breakdown*. Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain.
- d'Alfonso, L. 2023 Resilience Theory, Human Agency, and Political Archaeology: A RT Revised Model for the Understanding of the Late Bronze - Iron Age Transition in the Post-Hittite World. *Journal of Ancient Near Eastern History*. doi: 10.1515/janeh-2023-0001.
- Davis, B. 2018 Literacy in Cyprus and the Levant in the Early Iron Age: Continuities from the Bronze Age. In I. Shai, J. R. Chadwick, L. Hitchcock, A. Dagan, C. McKinnyand and J. Uziel (eds.), *Tell It in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 603-611. Münster, Zaphon.
- Davis, B., A. M. Maeir and L. A. Hitchcock 2015 Disentangling Entangled Objects: Iron Age Inscriptions from Philistia as a Reflection of Cultural Processes. *Israel Exploration Journal* 65/2: 140-166.
- de Martino, S. and E. Devecchi (eds.) 2020 *Anatolia between the 13th and the 12th Century BCE*. Firenze, LoGisma editore.
- Dickinson, O. T. P. K. 2019 What Conclusions Might Be Drawn from the Archaeology of Mycenaean Civilisation about Political Structure in the Aegean? In J. M. Kelder and W. J. I. Waal (eds.), *From 'LUGAL.GAL' to 'Wanax' Kingship and Political Organisation in the Late Bronze Age Aegean*, 31-48. Leiden, Sidestone Press.
- Dothan, T. and M. Dothan 1992 *People of the Sea: The Search for the Philistines*. New York, Scribner.
- Driessen, J. (ed.) 2018 *An Archaeology of Forced Migration: Crisis-Induced Mobility and the Collapse of the 13th c. BCE Eastern Mediterranean*. Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain.
- Driessen, J., J. Bretschneider and A. Kanta 2023 Prelude to Crisis? A Closer Look at Pyla Kokkinokremos. In T. Bürge and P. M. Fischer (eds.), *The Decline of Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*, 81-96. Nicosia, Paul Åström förlag.
- Driessen, J. and F. Gaignerot-Driessen 2023 Toppling the Domino: The Destruction of the Palace at Knossos and the Aegean Bronze Age Collapse. In T. Bürge and P. M. Fischer (eds.), *The Decline of Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*, 117-136. Nicosia, Paul Åström förlag.
- Duhoux, Y. 2012 The Most Ancient Cypriot Text Written in Greek: The Opheltas' Spit. *Kadmos* 51/1: 71-91.
- du Piëd, L. 2008 The Early Iron Age in the Northern Levant: Continuity and Change in the Pottery Assemblages from Ras El-Bassit and Ras Ibn Hani. In T. P. Harrison (ed.), *Cyprus, the Sea Peoples and the Eastern Mediterranean: Regional Perspectives of Continuity and Change*, 161-185. Toronto, Canadian Institute for Mediterranean Studies.
- Eder, B. and I. S. Lemos 2020 From the Collapse of the Mycenaean Palaces to the Emergence of Early Iron Age Communities. In I. S. Lemos and A. Kotsonas (eds.), *A Companion to the Archaeology of Early Greece and the Mediterranean*, 133-160. Hoboken, Wiley Blackwell.
- Emanuel, J. P. 2013 'Sherden from the Sea': The Arrival, Integration, and Acculturation of a 'Sea People'. *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 5/1: 14-27.
- Faust, A. 2018 Pigs in Space (and Time): Pork Consumption and Identity Negotiations in the Late Bronze and Iron Ages of Ancient Israel. *Near Eastern Archaeology* 81: 276-299.
- Feldman, M., D. M. Master, R. A. Bianco, M. Burri, P. W. Stockhammer, A. Mittnik, A. J. Aja, C. Jeong and J. Krause. 2019 Ancient DNA Sheds Light on the Genetic Origins of Early Iron Age Philistines. *Science Advances* 5/7: eaax0061. doi: 10.1126/sciadv.aax0061.
- Finné, M., K. Holmgren, C.-C. Shen, H.-M. Hu, M. Boyd and S. Stocker 2017 Late Bronze Age Climate Change and the Destruction of the Mycenaean Palace of Nestor at Pylos. *PLoS ONE* 12/12: e0189447. doi: 10.1371/journal.pone.0189447.
- Fischer, P. M. 2017 The 13th/12th Century BCE

- Destructions and the Abandonment of Hala Sultan Tekke, Cyprus. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 177-206. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Fischer, P. M. and T. Bürge (eds.) 2017 *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Franzmeier, H. 2022 The End of New Kingdom Egypt. In M. Gehler, R. Rollinger and P. Strobl (eds.), *The End of Empire*, 97-120. Wiesbaden, Springer.
- Frumin, S. 2022 Cereals and Fruits of the Philistines: Signs of Territorial Identity and Regional Involvement. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 10/3-4: 259-285.
- Frumin, S., A. M. Maeir, L. K. Horwitz and E. Weiss 2015 Studying Ancient Anthropogenic Impacts on Current Floral Biodiversity in the Southern Levant as Reflected by the Philistine Migration. *Scientific Reports* 5/1: 13308. doi: 10.1038/srep13308.
- Galil, G., A. Levinzon-Gilbo'a, A. M. Maeir and D. Kahn (eds.) 2012 *The Ancient Near East in the 12th-10th Centuries BCE: Culture and History—Proceedings of the International Conference, Held at the University of Haifa, May 2-5, 2010*. Münster, Ugarit-Verlag.
- Gander, M. 2017 The West: Philology. In M. Weeden and L. Z. Ullmann (eds.), *Hittite Landscape and Geography*, 262-280. Leiden and Boston, Brill.
- Gehler, M., R. Rollinger and P. Strobl (eds.) 2022 *The End of Empire*. Wiesbaden, Springer.
- Georgiou, A. 2017 Flourishing amidst a 'Crisis': The Regional History of the Paphos Polity at the Transition from the 13th to the 12th Centuries BCE. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 207-228. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Gilbert, A. S. 2017 Why Alashiya Is Still a Problem. In Ç. Maner, M. T. Horowitz and A. S. Gilbert (eds.), *Overtuning Certainties in Near Eastern Archaeology: A Festschrift in Honor of K. Aslıhan Yener*, 211-221. Leiden and Boston, Brill.
- Gilboa, A. and I. Sharon 2017 Fluctuations in Levantine Maritime Foci across the Late Bronze/Iron Age Transition: Charting the Role of the Sharon-Carmel (Tjekker) Coast in the Rise of Iron Age Phoenician Polities. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 285-298. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Grabbe, L. L. 2017 The Late Bronze Age: If We Had Only the Bible. In L. L. Grabbe (ed.), *The Land of Canaan in the Late Bronze Age*, 11-56. London & New York, Bloomsbury Publishing.
- Harrison, T. P. (ed.) 2008 *Cyprus, the Sea Peoples and the Eastern Mediterranean: Regional Perspectives of Continuity and Change*. Toronto, Canadian Institute for Mediterranean Studies.
- Harrison, T. P. 2009 Neo-Hittites in the 'Land of Palistin': Renewed Investigations at Tell Tayinat on the Plain of Antioch. *Near Eastern Archaeology* 72/4: 174-189.
- Hawkins, J. D. 2009 Cilicia, the Amuq, and Aleppo: New Light in a Dark Age. *Near Eastern Archaeology* 72/4: 164-173.
- Hawkins, J. D. 2011 The Inscriptions of the Aleppo Temple. *Anatolian Studies* 61: 35-54.
- Hinojosa-Prieto, H. R. 2020 Estimation of the Moment Magnitude and Local Site Effects of a Postulated Late Bronze Age Earthquake: Mycenaean Citadels of Tiryns and Midea, Greece. *Annals of Geophysics* 63/3. doi: 10.4401/ag-7721.
- Hinzen, K.-G., J. Maran, H. Hinojosa-Prieto, U. Damm-Meinhardt, S. K. Reamer, J. Tzislakis, K. Kemna, G. Schweppe, C. Fleische and K. Demakopoulou 2018 Reassessing the Mycenaean Earthquake Hypothesis: Results of the HERACLES Project from Tiryns and Midea, Greece. *Bulletin of the Seismological Society of America* 108/3A: 1046-1070.
- Hinzen, K.-G., M. Veters, T. Kalytta, S. K. Reamer and U. Damm-Meinhardt 2015 Testing the Response of Mycenaean Terracotta Figures and Vessels to Earthquake Ground Motions. *Geoarchaeology* 30/1: 1-18.
- Hitchcock, L. A. 2016 A Pirate's Life for Me: The Maritime Culture of the Sea Peoples. *Palestine Exploration Quarterly* 148/4: 245-264.
- Hitchcock, L. A. 2022 Sea People. In E. H. Cline (ed.), *Oxford Classical Dictionary*. Oxford, Oxford University Press.
- Hitchcock, L. A. and A. M. Maeir 2014 Yo-Ho, Yo-Ho, a Seren's Life for Me! *World Archaeology* 46/4: 624-640.
- Hodos, T. 2020 *The Archaeology of the Mediterranean Iron Age: A Globalising World c.1100-600 BCE*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Hoffmeier, J. K. 2018 A Possible Location in Northwest Sinai for the Sea and Land Battles between the Sea Peoples and Ramesses III. *Bulletin of the American Schools of Oriental Research* 380: 1-25.
- Holling, C. S. and L. H. Gunderson 2002 Resilience and Adaptive Cycles. In L. H. Gunderson and C. S. Holling (eds.), *Panarchy: Understanding Transformations in Human and Natural Systems*, 25-62. Washington DC, Island Press.
- Hornung, E., R. Krauss and D. A. Warburton (eds.) 2006 *Ancient Egyptian Chronology*. Leiden and Boston, Brill.
- Iacono, F., E. Borgna, M. Cattani, C. Cavazzuti, H. Dawson, Y. Galanakis, M. Gori, C. Iaia, N. Ialongoet and T. Lachenal 2022 Establishing the Middle Sea: The Late Bronze Age of Mediterranean Europe (1700-900 BC). *Journal of Archaeological Research* 30/3: 371-445. doi: 10.1007/s10814-021-09165-1.
- Iacovou, M. 2023 The First Urban Landscape of Southwest Cyprus: Paphos in the 'Age of Transformations'. In T. Bürge and P. M. Fischer (eds.), *The Decline of*

- Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*, 63–80. Nicosia, Paul Åström förlag.
- Janeway, B. 2008 The Nature and Extent of Aegean Contact at Tell Ta'yinat and Vicinity in the Early Iron Age: Evidence of the Sea Peoples? In T. P. Harrison (ed.), *Cyprus, the Sea Peoples and the Eastern Mediterranean: Regional Perspectives of Continuity and Change*, 123–146. Toronto, Canadian Institute for Mediterranean Studies.
- Janeway, B. 2017 *Sea Peoples of Northern Levant: Aegean-Style Pottery from Early Iron Age Tell Tayinat*. Leiden, Brill.
- Jung, R. 2017 The Sea Peoples after Three Millennia: Possibilities and Limitations of Historical Reconstruction. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 23–42. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Jung, R. and E. Kardamaki (eds.) 2022 *Synchronizing Palace Destructions in the Eastern Mediterranean*. Vienna, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Kahn, D. 2018 Ramesses III and the Northern Levant: A Reassessment of the Sources. In S. Kubisch and U. Rummel (eds.), *The Ramesside Period in Egypt: Studies into Cultural and Historical Processes of the 19th and 20th Dynasties, Proceedings of the International Symposium Held in Heidelberg, 5th to 7th June, 2015*, 175–188. Berlin, De Gruyter.
- Kaniewski, D. and E. Van Campo 2017 The Climatic Context of the 3.2 Kyr CalBP Event. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 85–94. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Kaniewski, D., E. Van Campo, J. Guiot, S. Le Burel, T. Otto and C. Baeteman 2013 Environmental Roots of the Late Bronze Age Crisis. *PLoS ONE* 8/8: e71004. doi: 10.1371/journal.pone.0071004.
- Kaniewski, D., E. Van Campo, K. Van Lerberghe, T. Boiy, K. Vansteenhuyse, G. Jans, K. Nys, H. Weiss, C. Morhange and T. Otto 2011 The Sea Peoples, from Cuneiform Tablets to Carbon Dating. *PLoS ONE* 6/6: e20232. doi: 10.1371/journal.pone.0020232.
- Kaniewski, D., N. Marriner, J. Bretschneider, G. Jans, C. Morhange, R. Cheddadi, T. Otto, F. Luce and E. Van Campo 2019 300-Year Drought Frames Late Bronze Age to Early Iron Age Transition in the Near East: New Palaeoecological Data from Cyprus and Syria. *Regional Environmental Change* 19/8: 2287–2297.
- Karageorghis, V. and O. Kouka (eds.) 2011 *On Cooking Pots, Drinking Cups, Loomweights and Ethnicity in Bronze Age Cyprus and Neighbouring Regions: An International Archaeological Symposium Held in Nicosia, November 6th-7th 2010*. Nicosia, A.G. Leventis Foundation.
- Kassianidou, V. 2013 The Production and Trade of Cypriot Copper in the Late Bronze Age. An Analysis of the Evidence. *Pasiphae* 7: 133–46.
- Kassianidou, V. 2023 Cypriot Copper Production, Consumption and Trade: Before and during the 12th Century BC. In T. Bürge and P. M. Fischer (eds.), *The Decline of Bronze Age Civilisations in the Mediterranean: Cyprus and Beyond*, 319–346. Nicosia, Paul Åström förlag.
- Kemp, L. and E. H. Cline 2022 Systemic Risk and Resilience: The Bronze Age Collapse and Recovery. In A. Izdebski, J. Haldon and P. Filipkowski (eds.), *Perspectives on Public Policy in Societal-Environmental Crises: What the Future Needs from History*, 207–223. Cham, Springer.
- Kelder, J. M. and W. J. I. Waal. 2019 Epilogue: Kings and Great Kings in the Aegean and Beyond. In J. M. Kelder and W. J. I. Waal (eds.), *From 'LUGAL.GAL' to 'Wanax' Kingship and Political Organisation in the Late Bronze Age Aegean*, 149–160. Leiden, Sidestone Press.
- Killebrew, A. E. 2005 *Biblical Peoples And Ethnicity: An Archaeological Study of Egyptians, Canaanites, Philistines, And Early Israel 1300-1100 B.C.E.* Leiden, Brill.
- Killebrew, A. E. 2014 Introduction to the Levant during the Transitional Late Bronze Age/ Iron Age I and Iron Age I Periods. In M. L. Steiner and A. E. Killebrew (eds.), *The Oxford Handbook of the Archaeology of the Levant c.8000—332 BCE*, 595–606. Oxford, Oxford University Press.
- Killebrew, A. E. and G. Lehmann (eds.) 2013 *The Philistines and Other "Sea Peoples" in Text and Archaeology*. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Knapp, A. B. 2020 Piracy in the Late Bronze Age Eastern Mediterranean? A Cautionary Tale. In A. Gilboa and A. Yasur-Landau (eds.), *Nomads of the Mediterranean: Trade and Contact in the Bronze and Iron Ages: Studies in Honor of Michal Artzy*, 138–156. Leiden and Boston, Brill.
- Knapp, A. B. 2021 *Migration Myths and the End of the Bronze Age in the Eastern Mediterranean*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Knapp, A. B. and S. W. Manning 2016 Crisis in Context: The End of the Late Bronze Age in the Eastern Mediterranean. *American Journal of Archaeology* 120/1: 99–149.
- Kreimerman, I. 2017 A Typology for Destruction Layers: The Late Bronze Age Southern Levant as a Case Study. In T. Cunningham and J. Driessen (eds.), *Crisis to Collapse: The Archaeology of Social Breakdown*, 173–203. Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain.
- Kristiansen, K. 2022 Toward a New Prehistory: Re-Theorizing Genes, Culture, and Migratory Expansions. In M. J. Daniels (ed.), *Homo Migrans: Modeling Mobility and Migration in Human History*, 31–53. New York, State University of New York Press.
- Langgut, D., I. Finkelstein and T. Litt 2013 Climate and the Late Bronze Collapse: New Evidence from the Southern Levant. *Tel Aviv* 40/2: 149–175.
- Lehmann, G. 2017 The Late Bronze - Iron Age Transition and the Problem of the Sea Peoples Phenomenon in

- Cilicia. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 229-256. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Levy, E., I. Finkelstein, M. A. S. Martin and E. Piasetzky 2022 The Date of Appearance of Philistine Pottery at Megiddo: A Computational Approach. *Bulletin of the American Society of Overseas Research* 387: 1-30.
- Linkov, I., S. E. Galaitsi, B. D. Trump, E. Pinigina, K. Rand, E. H. Cline and M. Kitsak 2024 Are Civilizations Destined to Collapse? Lessons from the Mediterranean Bronze Age. *Global Environmental Change* 84; 102792. doi: 10.1016/j.gloenvcha.2023.102792.
- Maeir, A. M. 2022a Thoughts on the Collapse: The Perspective of a Philistine. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 10/2: 194-199.
- Maeir, A. M. 2022b You've Come a Long Way, Baby! Changing Perspectives on the Philistines. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 10/3-4: 216-239.
- Maeir, A. M., B. Davis and L. A. Hitchcock 2016 Philistine Names and Terms Once Again: A Recent Perspective. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 4/4: 321-340.
- Maeir, A. M., I. Shai and C. McKinny (eds.) 2019 *The Late Bronze and Early Iron Ages of Southern Canaan*. Berlin and Boston, De Gruyter.
- Mangaloğlu-Votruba, S. 2014 Liman Tepe during the Late Bronze Age. In N. C. Stampolidis, Ç. Maner and K. Kopanias (eds.), *NOSTOI: Indigenous Culture, Migration and Integration in the Aegean Islands and Western Anatolia during the Late Bronze and Early Iron Age*, 647-668. İstanbul, Koç University Press.
- Manning, S. W., C. Kocik, B. Lorentzen and J. P. Sparks 2023 Severe Multi-Year Drought Coincident with Hittite Collapse around 1198-1196 BC. *Nature* 614/7949: 719-724.
- Maran, J. 2016 Against the Currents of History: The Early 12th c. BCE Resurgence of Tiryns. In J. Driessen (ed.), *RA-PI-NE-U: Studies on the Mycenaean World offered to Robert Laffineur for his 70th Birthday*, 201-220. Louvain-la-Neuve, Presses universitaires de Louvain.
- Maran, J. 2022a Archaeological Cultures, Fabricated Ethnicities and DNA Research: 'Minoans' and 'Mycenaean' as Case Examples. In U. Davidovich, N. Yahalom-Mack and S. Matskevich (eds.), *Material, Method, and Meaning: Papers in Eastern Mediterranean Archaeology in Honor of Ilan Sharon*, 7-25. Münster, Zaphon.
- Maran, J. 2022b The Demise of the Mycenaean Palaces: The Need for an Interpretative Reset. In R. Jung and E. Kardamaki (eds.), *Synchronizing the Destructions of the Mycenaean Palaces*, 231-254. Vienna, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Martín Garcia, J. M. and M. Artzy 2018 Cultural Transformations Shaping the End of the Late Bronze Age in the Levant. In B. Horejs and Ch. Schwall (eds.), *Proceedings of the 10th International Congress on the Archaeology of the Ancient Near East, Volume 1*, 97-106. Wiesbaden, Harrasowitz.
- Masetti-Rouault, M. G., I. Calini, R. Hawley and L. d'Alfonso (eds.) (forthcoming). *Between the Age of Diplomacy and the First Great Empire in Ancient West Asia (1200 - 900 BC): Moving Beyond the Paradigm of Collapse and Regeneration*. New York, New York University Press.
- Maspero, G. 1896 *Struggle of the Nations: Egypt, Syria and Assyria*. London, Society for Promoting Christian Knowledge.
- Matić, U. 2022 Why Were the Leaders of the Sea Peoples Called 'z.w and Not wr.w? On the Size and Raiding Character of the Sea Peoples' Groups. *Bulletin of the American Society of Overseas Research* 388: 73-89.
- Matić, U. and F. Franković 2020 The Sea Peoples and the Discourse of Balkanism in Archaeology of the Late Bronze Age. In M. Gavranović, D. Heilmann, A. Kapuran and M. Verčik (eds.), *Spheres of Interaction. Contacts and Relationships between the Balkans and Adjacent Regions in the Late Bronze - Iron Age*, 155-176. Rahden/Westfalen, Verlag Marie Leidorf GmbH.
- Meiberg, L. G. 2013 Aegean or Anatolian? In A. E. Killebrew and G. Lehmann (eds.), *The Philistines and Other "Sea Peoples" in Text and Archaeology*, 131-144. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Meiberg, L. G. 2018 Decorative Motifs on Philistine Pottery and Their Connections to Crete. In I. Shai, J. R. Chadwick, L. Hitchcock, A. Dagan, C. McKinny and J. Uziel (eds.), *Tell It in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 322-335. Münster, Zaphon.
- Meyer, N. and A. B. Knapp 2021 Resilient Social Actors in the Transition from the Late Bronze to the Early Iron Age on Cyprus. *Journal of World Prehistory* 34/4: 433-487.
- Middleton, G. D. 2015 Telling Stories: The Mycenaean Origins of the Philistines. *Oxford Journal of Archaeology* 34/1: 45-65.
- Middleton, G. D. 2016 Book Review of 1177 B.C.: The Year Civilization Collapsed, by Eric H. Cline. *American Journal of Archaeology* 120/3. doi: 10.3764/ajonline1203.Middleton.
- Middleton, G. D. 2017a *Understanding Collapse: Ancient History and Modern Myths*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Middleton, G. D. 2017b The Show Must Go On: Collapse, Resilience, and Transformation in 21st-Century Archaeology. *Reviews in Anthropology* 46/2-3: 78-105.
- Middleton, G. D. (ed.) 2020 *Collapse and Transformation: The Late Bronze Age to Early Iron Age in the Aegean*. Oxford, Oxbow books.
- Middleton, G. D. 2022 Revisiting 1177 BCE and the Late Bronze Age Collapse. *Journal of Eastern Mediterranean Archaeology and Heritage Studies* 10/2: 186-191.

- Millek, J. M. 2017 Sea Peoples, Philistines, and the Destruction of Cities: A Critical Examination of Destruction Layers 'Caused' by the 'Sea Peoples'. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 113-140. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Millek, J. M. 2018a Destruction and the Fall of Egyptian Hegemony over the Southern Levant. *Journal of Ancient Egyptian Interconnections* 19/1: 1-21.
- Millek, J. M. 2018b Just How Much Was Destroyed? The End of the Late Bronze Age in the Southern Levant. *Ugarit-Forschungen* 49: 239-274.
- Millek, J. M. 2019a Crisis, Destruction, and the End of the Late Bronze Age in Jordan: A Preliminary Survey. *Zeitschrift des Deutschen Palästina-Vereins* 135/2: 119-142.
- Millek, J. M. 2019b Destruction at the End of the Late Bronze Age in Syria: A Reassessment. *Studia Eblaitica* 5: 157-190.
- Millek, J. M. 2020 'Our City Is Sacked. May You Know It!' The Destruction of Ugarit and Its Environs by the 'Sea Peoples'. *Archaeology and History of the Lebanon* 52-53: 102-132.
- Millek, J. M. 2022a The Impact of Destruction on Trade at the End of the Late Bronze Age in the Southern Levant. In F. Hagemeyer (ed.), *Jerusalem and the Coastal Plain in the Iron Age and Persian Periods*, 39-60. Tübingen, Mohr Siebeck.
- Millek, J. M. 2022b Troy, the Sea Peoples and 1200 B.C.: The Origins and Future of an Iconic Date. *Ugarit-Forschungen* 52: 159-178.
- Millek, J. M. 2023 *Destruction and Its Impact on Ancient Societies at the End of the Bronze Age: Destruction and Its Impact on Ancient Societies*. Columbus, Lockwood Press.
- Miller, J. L. 2020 Are There Signs of the Decline of the Late Hittite State in the Textual Documentation from Hattuša? In S. de Martino and E. Devecchi (eds.), *Anatolia between the 13th and the 12th Century BCE*, 237-255. Firenze, LoGisma editore.
- Morris, E. 2018 *Ancient Egyptian Imperialism*. Hoboken, Wiley Blackwell.
- Mountjoy, P. A. 2020 LH IIIC Pottery and Destruction in the East Aegean-West Anatolian Interface, Cilicia, Cyprus and Coastal Levant. In G. D. Middleton (ed.), *Collapse and Transformation: The Late Bronze Age to Early Iron Age in the Aegean*, 169-200. Oxford, Oxbow Books.
- Murray, S. C. 2018 Imported Exotica and Mortuary Ritual at Perati in Late Helladic IIIC East Attica. *American Journal of Archaeology* 122/1: 33-64.
- Mynářová, J. 2022 Liminal People(s) in the Late Bronze Age Levant? A New Light on Sherden (Šerdanu). *Journal of Ancient Near Eastern History* 9/2: 285-304.
- Nakassis, D. 2022 The Aegean in the Context of the Eastern Mediterranean World. In K. Radner, N. Moeller and D. T. Potts (eds.), *The Oxford History of the Ancient Near East. Volume III: From the Hyksos to the Late Second Millennium BC*, 623-706. Oxford, Oxford University Press.
- Newhard, J. M. L. and E. H. Cline 2022 Panarchy and the Adaptive Cycle: A Case Study from Mycenaean Greece. In A. Izdebski, J. Haldon and P. Filipkowski (eds.), *Perspectives on Public Policy in Societal-Environmental Crises*, 225-235. Cham, Springer.
- Niesiolowski-Spanò, Ł. 2016 *Goliath's Legacy: Philistines and Hebrews in Biblical Times*. Wiesbaden, Harrassowitz Verlag.
- Niesiolowski-Spanò, Ł. and M. Węcowski (eds.) 2018 *Change, Continuity, and Connectivity: North-Eastern Mediterranean at the Turn of the Bronze Age and in the Early Iron Age*. Wiesbaden, Harrassowitz.
- Norrie, P. 2016 *A History of Disease in Ancient Times: More Lethal than War*. Cham, Palgrave Macmillan.
- Nowicki, K. 2018 The Late 13th c. BCE Crisis in the East Mediterranean: Why the Case of Crete Matters? In J. Driessen (ed.), *An Archaeology of Forced Migration: Crisis-Induced Mobility and the Collapse of the 13th c. BCE Eastern Mediterranean*, 117-148. Louvain-la-Neuve, Presses Universitaires de Louvain.
- Núñez, F. J. 2017 The Impact of the Sea Peoples in the Central and Northern Levant in Perspective. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 263-284. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Pedrazzi, T. 2022 Canaanite Jars in Cyprus in the 13th-12th Centuries BC: Transfer of Goods, Transformation of Networks. In G. Bourogiannis (ed.), *Beyond Cyprus: Investigating Cypriot Connectivity in the Mediterranean from the Late Bronze Age to the End of the Classical Period*, 119-130. Athens, AURA & Kardamitsa.
- Phialon, L. 2020 The End of a World: Local Conflict and Regional Violence in Mycenaean Boeotia? In F. Marchand and H. Beck (eds.), *The Dancing Floor of Ares Local Conflict and Regional Violence in Central Greece*, 21-45. Calgary and Alberta, Ancient History Bulletin.
- Popko, L. 2016 Die hieratische Stele MAA 1939.552 aus Amara West - Ein neuer Feldzug gegen die Philister. *Zeitschrift für ägyptische Sprache und Altertumskunde* 143/2: 214-233.
- Price, M. D. 2020 *Evolution of a Taboo: Pigs and People in the Ancient Near East*. Oxford, Oxford University Press.
- Rainey, A. F. and W. M. Schniedewind 2015 *The El-Amarna Correspondence: A New Edition of the Cuneiform Letters from the Site of El-Amarna Based on Collations of All Extant Tablets*. Leiden, Brill.
- Raphael, K. and A. Agnon 2018 Earthquakes East and West of the Dead Sea Transform in the Bronze and Iron Ages. In I. Shai, J. R. Chadwick, L. Hitchcock, A. Dagan, C. McKinnyand and J. Uziel (eds.), *Tell It in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 769-798. Münster,

- Zaphon.
- Redford, D. B. 2018 *The Medinet Habu Records of the Foreign Wars of Ramesses III*. Leiden, Brill.
- Roberts, R. G. 2009 Identity, Choice, and the Year 8 Reliefs of Ramesses III at Medinet Habu. In R. G. Roberts and C. Bachhuber (eds.), *Forces of Transformation: The End of the Bronze Age in the Mediterranean*, 60–68. Oxford, Oxbow Books.
- Roberts, R. G. 2015 Changes in Perceptions of the ‘Other’ and Expressions of Egyptian Self-Identity in the Late Bronze Age. In A. B. Knapp and P. van Dommelen (eds.), *The Cambridge Prehistory of the Bronze and Iron Age Mediterranean*, 352–366. Cambridge, Cambridge University Press.
- de Rougé, E. 1855 *Notice de quelques textes hiéroglyphiques récemment publiés par M. Greene*. Paris, Thunot.
- Routledge, B. 2017 Is There an Iron Age Levant? *Revista del Instituto de Historia Antigua Oriental* 18: 49–76.
- Sapir-Hen, L. 2019 Food, Pork Consumption, and Identity in Ancient Israel. *Near Eastern Archaeology* 82/1: 52–59.
- Sharon, I. and A. Gilboa 2013 Dor in the Early Iron Age. In A. E. Killebrew and G. Lehmann (eds.), *The Philistines and Other "Sea Peoples" in Text and Archaeology*, 393–468. Atlanta, Society of Biblical Literature.
- Sherratt, S. 1998 ‘Sea Peoples’ and the Economic Structure of the Late Second Millennium in the Eastern Mediterranean. In S. Gitin, A. Mazar and E. Stern (eds.), *Mediterranean Peoples in Transition: Thirteenth to Early Tenth Century BCE*, 292–313. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Silberman, N. 1998 The Sea Peoples, the Victorians, and Us. In S. Gitin, A. Mazar and E. Stern (eds.), *Mediterranean Peoples in Transition: Thirteenth to Early Tenth Centuries BCE*, 268–275. Jerusalem, Israel Exploration Society.
- Simon, Z. 2011 The Identification of Qode. Reconsidering the Evidence. In J. Mynářová (ed.), *Egypt and the Near East – the Crossroads Proceedings of an International Conference on the Relations of Egypt and the Near East in the Bronze Age, Prague, September 1–3, 2010*, 249–269. Prague, Czech Institute of Egyptology, Faculty of Arts.
- Simon, Z. 2020 The Formation of the Neo-Hittite States in Karkemish, in Its Successor States and in the Breakaway Territories: An Overview of Political History. In A. E. Sollee (ed.), *Formation, Organisation and Development of Iron Age Societies. A Comparative View. Proceedings of the Workshop Held at the 10th ICAANE in Vienna, April 2016*, 151–171. Vienna, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Stamplidis, N. C., Ç. Maner and K. Kopanias (eds.) 2015 *NOSTOI: Indigenous Culture, Migration and Integration in the Aegean Islands and Western Anatolia during the Late Bronze and Early Iron Age*. İstanbul, Koç University Press.
- Stiebing Jr., W. H. and S. N. Helft 2023 *Ancient Near Eastern History and Culture, 4th Edition*. New York and Oxon, Routledge.
- Stockhammer, P. W. 2018 Rethinking Philistia as a Contact Zone. In I. Shai, J. R. Chadwick, L. Hitchcock, A. Dagan, C. McKinny and J. Uziel (eds.), *Tell It in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 375–384. Münster, Zaphon.
- Stockhammer, P. W. 2019 Shifting Meanings and Values of Aegean-Type Pottery in the Late Bronze Age Southern Levant. In A. M. Maeir, I. Shai and C. McKinny (eds.), *The Late Bronze and Early Iron Ages of Southern Canaan*, 233–246. Berlin and Boston, De Gruyter. doi: 10.1515/9783110628371-012.
- Stockhammer, P. W. 2022 Aegean-Type Pottery from Megiddo, Areas H and K. In I. Finkelstein and M. A. S. Martin (eds.), *Megiddo VI: The 2010–2014 Seasons, Vol. II*, 763–779. Pennsylvania, Eisenbrauns.
- Strobel, K. 2013 Qadesh, Sea-Peoples, and Anatolian-Levantine Interactions. *Ancient Near Eastern Studies / Supplement* 42: 501–538.
- Van de Moortel, A. 2020 Sea Peoples from the Aegean: Identity, Sociopolitical Context, and Antecedents. In A. Gilboa and A. Yasur-Landau (eds.), *Nomads of the Mediterranean: Trade and Contact in the Bronze and Iron Ages: Studies in Honor of Michal Artzy*, 318–325. Leiden, Brill.
- Venturi, F. (ed.) 2010 *Societies in Transition: Evolutionary Processes in the Northern Levant between Late Bronze Age II and Early Iron Age: Papers Presented on the Occasion of the 20th Anniversary of the New Excavation in Tell Afis, Bologna, 15th November 2007*. Bologna, Clueb.
- Venturi, F. 2013 The Transition from the Late Bronze Age to the Early Iron Age at Tell Afis, Syria (Phases VII–III). In K. A. Yener (ed.), *Across the Border: Late Bronze-Iron Age Relations between Syria and Anatolia: Proceedings of a Symposium Held at the Research Center of Anatolian Studies, Koç University, İstanbul May 31–June 1, 2010*, 227–259. Leuven, Peeters.
- Venturi, F. 2020 *Tell Afis: The Excavations of Areas E2–E4. Phases V–I. The End of the Late Bronze/ Iron Age I Sequence. Stratigraphy, Pottery and Small Finds*. Firenze, Le Lettere.
- Wachsmann, S. 1998 *Seagoing Ships & Seamanship in the Bronze Age Levant*. College Station, Texas A&M University Press.
- Walløe, L. 1999 Was the Disruption of the Mycenaean World Caused by Repeated Epidemics of Bubonic Plague? *Opuscula Atheniensia* 24: 121–126.
- Weeden, M. 2013 After the Hittites: The Kingdoms of Karkamish and Palistin in Northern Syria. *Bulletin of the Institute of Classical Studies* 56/2: 1–20.
- Welton, L., T. P. Harrison, S. Batiuk, E. Ünlü, B. Janeway, D. Karakaya, D. Lipovitch, D. Lumb and J. Roames 2019 Shifting Networks and Community Identity at Tell Tayinat in the Iron I (ca. 12th to Mid 10th Century B.C.E.). *American Journal of Archaeology* 123/2: 291–333.
- Wiener, M. H. 2017 *Causes of Complex Systems Collapse*

- at the End of the Bronze Age. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 43-74. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Winter, M. A. 2023 Towards a Model for Sociocultural Transformation: Anthropocentric Approaches to Resilience, Collapse, and Resistance. *Journal of Ancient Near Eastern History*. doi: 10.1515/janeh-2022-0012.
- Woudhuizen, F. C. 2022 Arzawa, Assuwa, and Mira: Three Names for One and the Same Country in Western Anatolia. In I. Hajnal, E. Zangger and J. Kelder (eds.), *The Political Geography of Western Anatolia in the Late Bronze Age*, 271-302. Budapest, Archaeolingua.
- Wylie, J. and D. Master 2020 The Conditions for Philistine Ethnogenesis. *Ägypten und Levante* 30: 547-568.
- Yasur-Landau, A. 2010 *The Philistines and Aegean Migration at the End of the Late Bronze Age*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Yasur-Landau, A. 2017 Some Notes on Philistines, Migration and Mediterranean Connectivity. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 141-148. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- Yasur-Landau, A., G. Gambash and T. E. Levy (eds.) (forthcoming) *Mediterranean Resilience Collapse and Adaptation in Antique Maritime Societies*, Sheffield, Equinox Publishing Ltd.
- Yener, A. (ed.) 2013 *Across the Border: Late Bronze-Iron Age Relations between Syria and Anatolia: Proceedings of a Symposium Held at the Research Center of Anatolian Studies, Koç University, Istanbul, May 31 - June 1, 2010*. Leuven, Peeters.
- Ziffer, I. 2018 Philistine Head Cups Once More. In I. Shai, J. R. Chadwick, L. Hitchcock, A. Dagan, C. McKinny and J. Uziel (eds.), *Tell It in Gath: Studies in the History and Archaeology of Israel Essays in Honor of Aren M. Maeir on the Occasion of His Sixtieth Birthday*, 336-351. Münster, Zaphon.
- Zuckerman, S. 2007 Anatomy of a Destruction: 'Crisis Architecture', Termination Rituals and the Fall of Canaanite Hazor. *Journal of Mediterranean Archaeology* 20/1: 3-32.
- Zuckerman, S., S. Bechar, D. Ben-Shlomo, H. Mommsen and P. A. Mountjoy 2020 Neutron Activation Analysis of Mycenaean Pottery from North Israel: Reconstruction of Aegean-Levantine Trade Patterns. *Ägypten und Levante* 30: 569-633.
- Zwickel, W. 2017 Philistines and Danites. In P. M. Fischer and T. Bürge (eds.), *'Sea Peoples' Up-to-Date: New Research on Transformation in the Eastern Mediterranean in 13th-11th Centuries BCE*, 329-352. Wien, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
- 阿部健一・M.ゲルゲイ 2022「生態学的レジリエンス」稲村哲也・山極壽一・清水 展・阿部健一(編)『レジリエンス人類史』19-23頁 京都大学学術出版会。
- 内田杉彦 2007『古代エジプト入門』岩波書店。
- 大村幸弘 2022『食料庫跡』が示す新たな滅亡についての仮説—ヒッタイト帝国の崩壊』鈴木 董(編)『帝国の崩壊：歴史上の超大国はなぜ滅びたのか』81-114頁 山川出版社。
- 小野塚拓造 2022『東地中海地域における青銅器・鉄器時代移行期』を理解するために『古代文化』74巻1号 37-40頁。
- 河合 望 2021『古代エジプト全史』雄山閣。
- 間舎裕生 2022『「はざま」としての南レヴァント』『古代文化』73巻4号 58-72頁。
- 近藤二郎 2022『「海の民」侵入による衰退説は真実か—エジプト新王国の崩壊』鈴木 董(編)『帝国の崩壊：歴史上の超大国はなぜ滅びたのか』25-56頁 山川出版社。
- 全国歴史教育研究協議会(編) 2023『世界史用語集』山川出版社。
- 高橋裕子 2020「ギリシアのアルゴリスにおける後期青銅器時代 III C 期から原幾何学文様期にかけての埋葬資料」『マテシス・ウニヴェルサリス』(獨協大学国際教養学部言語文化学科) 21 巻 2 号 233-277 頁。
- 高橋裕子 2022「ギリシアの初期鉄器時代—青銅器時代終末期以来の社会変動と対外関係—」『古代文化』74巻1号 24-36頁。
- 津本英利 2021「西アジアにおける鉄器時代への移行の様相」『古代文化』73巻4号 25-36頁。
- 津本英利 2023『ヒッタイト帝国：「鉄の王国」の実像』PHP 研究所。
- 土居通正 2022「宮殿焼失前の城壁拡張が示唆する、近づく戦争の脅威—エーゲ文明(ミケーネ「帝国」)の崩壊』鈴木 董(編)『帝国の崩壊：歴史上の超大国はなぜ滅びたのか』57-80頁 山川出版社。
- 日本西アジア考古学会 西アジア考古学講義ノート編集委員会(編) 2022『西アジア考古学講義ノート(改訂版)』西アジア考古学会。
- 長谷川修一 2013『聖書考古学』中央公論新社。
- 馬場匡浩 2017『古代エジプトを学ぶ』六・書房。
- 桃木至朗・杉本淑彦・指 昭博・青野公彦・三田昌彦・清水和裕・吉澤誠一郎・山下範久・杉山清彦・末近浩太・青木一真・大橋康一・加藤健司・川島啓一・後藤誠司・野々山新・美那川雄一・株式会社帝国書院 2023『新詳世界史探究』帝国書院。
- 山崎世理愛・五十嵐大介 2023『一冊でわかるエジプト史』河出書房新社。